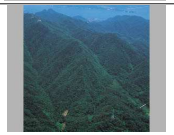
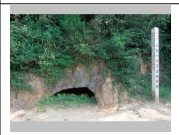
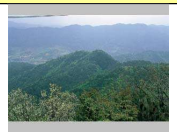
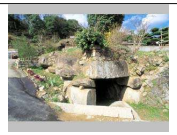
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	兜山古墳	かぶとやまこふん		三原市沼田東町字山崎	昭12.5.28	円墳	直径45m，高さ7m	沼田川（ぬたがわ）下流右岸の標高67mの山頂に位置し，かっては湾奥の海に面した環境にあったと推定される。直径約45m，高さ7mの円墳で，北側に低い造出が存在すると言われるが明瞭でない。墳頂部と墳丘部に円筒埴輪がめぐらされ，斜面に葺石（ふきいし）が存在する。内部主体は未発掘のため不明であるが，墳丘裾付近で鉄手鎌，須恵器片などが採集されている。沼田川下流域の最大規模の円墳であり，5世紀中頃の古墳と推定される。 なお，古墳の南側約170mの同一丘陵には，家形埴輪などが出土した鳴岡古墳（径36.5m，高さ5.5mの円墳）や，古墳の北にのびる丘陵下手には横穴式石室があり，製塩土器などが採集されている。		
県	史跡	矢野城跡	やのじょうあと		広島市安芸区矢野町	昭12.5.28			後醍醐天皇による建武の新政の後，建武2年（1335）11月には足利尊氏(あしかがたかうじ)が新政に叛旗をひるがえし，南北朝の争乱が始まる。安芸国の守護武田氏をはじめ，芸備の御家人武士の大半は尊氏方に同調したが，その年の12月，安芸の熊谷(くまがい)四郎三郎蓮覚(れんがく)(直行)は，南朝方に組したため，守護武田氏をはじめ，吉川氏，毛利氏，さらに蓮覚の惣領家の熊谷氏までが蓮覚の守る矢野城を包囲攻撃し，蓮覚は戦死して城は落ち た。 矢野城は保木(ほき)(発喜)城ともよばれ，南方は絵下山を後衛とし，北は矢野川の谷が開けて大手となり，西方は明神山の尾根に茶臼山があって搦手(からめて)をなし，さらに海岸の遠見の城に連絡している。この城は室町時代後期(15世紀中葉)にはこの地方の領主，野間氏の居城となった。		
県	史跡	姫谷焼窯跡	ひめたにやきかまあと		福山市加茂町百谷	昭12.5.28 昭53.10.4（追加指定）			肥前有田や加賀古九谷とともに，色絵磁器を生産した近世前期（17世紀）の窯で，姫谷（標高約430m）の西面した丘陵端に位置し，背後の斜面を削平して窯場を造成している。 昭和52・53年（1977・1978）の発掘調査で，指定地のほぼ中央に，2基の階段式連房登窯が上下に重なって検出された。上層の窯（第2号窯）は，全長16m，房の幅3.1m，焚口（たきぐち）から胴本間（どうこま）をへて6室（一時は7室）があり，房の奥行2.5m，前面に幅60cmの火床を設けている。 下層（第1号窯）は，焚口がやや北にずれるが，上端はほぼ重なり，規模・構造とも第2号窯に共通する。出土陶磁類には，伝世品の種類と合致する白磁色絵のほか，染付，青磁，黒褐釉（こっかつゆう）などを含む。		
県	史跡	磯宮	いそのみや		竹原市竹原町字白島	昭12.5.28			建久5年（1194）宇佐から勧請(かんじょう)したといわれる八幡神社である。 唐崎常陸介(からさきひたちのすけ)はここの神官であり，境内の千引岩に宋の文天祥(ぶんてんしょう)の書を模して，忠孝の二大字を刻した。江戸幕府の威権の盛んな時に尊王思想を明示したものとして注目される。		
県	史跡	頼杏坪役宅 ※頼は旧字	らいきょうへいやくたく		三次市三次町	昭12.5.28	単層茅葺		頼杏坪(らいきょうへい)は文化8年（1811），50歳を過ぎたころから郡代官，郡廻(ぐんまわ)りとして備北四郡の民政に尽くし，専売制の強化がいかに農民の利益を奪うかに注目し，郡村犠牲のもとに城下町の富強をはかることの矛盾を鋭く指摘した。しかし建議は入れられず，杏坪は，代官を罷免されて文政11年（1828）から3年間，三次町奉行(みよしまちぶぎょう)を勤めた。杏坪は，彼の罷免で郡中が動揺し再び郡廻りを兼務することになったほど，郡民に信望が厚かったという。陶淵明（とうえんめい）の故事にちなんで運甓居(うんぺきょ)と名づけられた三次町奉行当時の役宅（平屋かやぶき）は今もその簡素な遺風をしのばせている。		
県	史跡	三次社倉	みよししゃそう		三次市三次町	昭12.5.28 昭59.11.19（一部解除）			飢饉に備えて穀物を特別に貯えておくことは，中国や朝鮮にも例があり，わが国，古代にも行われた。貢租，課役の負担の過重な江戸時代には凶作のたびごとに飢饉が起り，18世紀頃から全国諸藩の中ではこの制度をはじめる例が見られた。 広島藩の社倉は，海田市の儒者加藤缶楽(かとうふらく)の教えをうけた安芸郡矢野村の神官香川正直(かがわまさなお)の指導によって矢野村・押込村で寛延2年（1749）社倉法による備荒貯麦をはじめたことに由来する。その効果の大きいことを認めた藩では，安永8年（1779）藩内全郡の村々に社倉法の実施を命じ，以後，明治初年まで存続した。 三次(みよし)社倉は頼杏坪(らいきょうへい)が三次町奉行在職中に設けたものである。		
県	史跡	康徳寺古墳	こうとくじこふん		世羅郡世羅町寺町小字箕口	昭15.2.23	円墳（横穴式石室）	直径15m，高さ5m 石室／奥行き9.5m（玄室7.5m，羨道2m），幅2.45m，高さ2.4m	世羅盆地の北西寄りの丘陵斜面に位置し，臨済宗康徳寺の門前にあるところから，この古墳の名称がつけられた。直径約17m，高さ約5mの円墳で，内部主体は横穴式石室である。石室は全長9.5m，高さ2.4mで，玄室は長さ5.9m，中央幅2.5m，高さ（奥壁部）3.2m，羨道は長さ2.4m，幅1.8mで，この地域では最大規模である。石室の構造などから6世紀末頃のものと推定される。 平成7・8年（1995・1996）に環境整備事業が行われ，須恵器・土師器・耳環のほか中世の土師質土器・瓦器・土鍋などや，仏具や泥塔，墨書碑などが出土した。 この古墳の東側に接して，白鳳時代（7世紀後半ごろ）の古瓦を出土する寺院跡があり，康徳寺廃寺跡と称される。この古墳の被葬者につらなる豪族によって，寺院の建立された可能性も強い。		
県	史跡	熊野の古代土器窯跡	くまののこだいどきかまあと		福山市熊野町草田字深田	昭15.2.23	平安時代，須恵器焼成のための登り窯	長さ3.9m，幅1.35m，高さ1.05m，壁の厚さ9cm，煙出し直径24cm	沼隈半島中央部の南面した傾斜地に位置する須恵器焼成の登窯である。 4基のうちの上手東側の1基（草田第1号窯）は傾斜面に平行して南北方向につくられ，長さ4m，最大幅1.4m，高さ1mで，南端に焚口，北端に直径24cmの煙出しが設けられており，焚口以外は比較的よく原型を残している。窯跡ならびに付近から出土した須恵器は，杯，高台付杯，坩（かん），甕(かめ)などで，平安時代（794～1184）の特徴を示している。 このほか第1号窯の東南に全長2.7mの第2号窯，第2号窯の西に第3号窯，さらにその西土手に第4号窯が位置し，後二者の窯では瓦類をも焼成している。		
県	史跡	万福寺跡	まんぶくじあと		世羅郡世羅町堀越字日南	昭15.2.23	中世の寺院跡		世羅町京丸地区の天神社谷の奥まった場所に位置し，小坂山と号す中世の寺院跡と言われる。盆地との比高約50m，三方を丘陵に囲まれれ，南に開けた傾斜地で，寺院跡の位置は明瞭でないが，幅50～60m，奥行約100mの広さがある。現在上手中央の奥まった所に宝篋印塔（ほうきょういんとう）と五輪塔残片があり，南西小祀（しょうし）の付近にも五輪塔，宝篋印塔多数がある。また，この寺跡を囲む東側の丘陵尾根上には，正平12年（1357）の紀年銘をもつ宝篋印塔，西の丘には応安3年（1370）の紀年銘をもつ石造七層塔婆（県重文）などがある。		

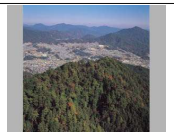
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	三ノ瀬朝鮮信使宿館跡	さんのせちょうせんしんししゅくかんあと		呉市下蒲刈町字三ノ瀬	昭15.2.23			慶長12年(1607)から文化8年(1811)に至る朝鮮通信使の来朝は，総人員400～500名にのぼり，幕府をはじめ沿路の大名は，接待警固に全力を尽くした。通信使は瀬戸内海を船で往復し，蒲刈島の三ノ瀬には，たいてい船を寄せて一泊した。その接待は浅野藩で，供応の豪勢なことは驚くばかりであった。 通信使の宿館は上の御茶屋であったが，下の御茶屋と本陣もあわせて使われた。信使来朝の停止後は，まもなく御茶屋は壊されたとみえ，文化年間(1804～1818)には，屋敷跡の石垣を残すばかりとなった。現在は，上の御茶屋に達する折れまがりの路地と石段が残るのみである。		
県	史跡	蒲刈島御番所跡	かまがりじまごばんしょあと		呉市下蒲刈町字三ノ瀬	昭15.2.23			蒲刈(かまがり)は古くから内海航路の要衝で，福島正則は三の瀬に海駅を設け，長雁木(なががんぎ)を築いた。江戸時代(1603～1867)，浅野藩はここを公の繋船場として，番所や本陣の御茶屋(おちゃや)を常備したので，参勤交代をする西国大名の船をはじめ各国の使節もここに立ち寄った。 蒲刈の番所には繋船奉行(ぶぎょう)のもとに，船頭・水主(かこ)が常備され番船や水船などがいつもつながれて海上の警固に当たった。番船の繋船場は西側七間に東側十二間の波止(はと)を築いて造られたいう。		
県	史跡	三ノ瀬御本陣跡	さんのせごほんじんあと		呉市下蒲刈町字三ノ瀬	昭15.2.23			蒲刈(かまがり)は古くから内海航路の要衝で，江戸時代初期(17世紀初期)，福島正則は三の瀬に海駅を設け，長雁木(なががんぎ)を築いた。浅野藩はここを公の繋船場として，番所や本陣の御茶屋を常備したので，参勤交代をする西国大名の船をはじめ各国の使節もここに立ち寄った。 三ノ瀬本陣は港に臨み，浜本陣の形態が整えられていた。		
県	史跡	鞆七卿落遺跡	ともしちきょうおちいせき		福山市鞆町鞆字西町	昭15.2.23			幕末維新の際京都にあって攘夷(じょうい)討幕のことを策した三条実美(さんじょうさねとみ)ら七卿は，朝議一変のため文久3年(1863)一旦長州にのがれ，翌元治元年(1864)7月再び上洛(じょうらく)を企てた。 途中，鞆に2泊したが，蛤御門(はまぐりごもん)の変に長州勢が敗れたことを讃岐(さぬき)の多度津で知り，ただちに長州への途につき，7月23日再び鞆に泊った。この時の宿所がもとの保命酒造酒屋の中村氏宅である。 現在，本宅・土蔵などの建造物は重要文化財(太田家住宅)に指定されている。		関連施設：福山市鞆の浦歴史民俗資料館(084-982-1121)
県	史跡	御手洗七卿落遺跡	みたらいしちきょうおちいせき		呉市豊町御手洗字蛭子町	昭15.2.23			幕末維新の転回期，長州藩は三条実美(さんじょうさねとみ)らの公卿と結んで攘夷親征を企てたが，孝明天皇の忌避するところとなり，実美らは禁足を命ぜられた。実美らも七卿(しちきょう)は長州勢とともに，文久3年(1863)8月，いったん長州へ下向し，京都の動静が好転をつげた元治元年(1864)7月13日，再び上京の途についた。 しかし，途中長州勢が蛤御門(はまぐりごもん)の変に敗れたことを聞き，急遽長州に引き返すことにし，22日鞆(とも)で軍議を行い，西風激しい中を23日御手洗に着き，ここで順風を待つために豪商多田家にはいって1泊し，翌日長州上の関へ向って出発した。 御手洗東端の景勝の位置をしめ，現在は御手洗地区重要伝統的建造物群保存地区内で，休憩所・資料館として整備されている。		
県	史跡	若胡子屋跡	わかえびすやあと		呉市豊町御手洗字天神	昭15.2.23	入母屋造，2階建，本瓦葺		瀬戸内海の航路は，もと山陽沿岸を通っていたが，近世に入ると内海中心部を航海する「沖乗り」が発達してきた。御手洗(みたらい)は沖乗り航路の要衝に当たっていたので，寛文年間(1661～1673)以来，新たに港町として繁栄した。 これに伴って遊楽施設も整備され，数軒の茶屋が営まれた。中でも享保9年(1724)に公認された若胡子屋(わかえびすや)は，いつでも99人の遊女をかかえるほどの繁盛であったと言われる。入母屋造りの二階建，本瓦葺きの建物はよく旧観を維持し，2階の部屋には遊客の落書きや，かむろの手形も残されている。裏庭の五色の小石で築いた塀なども当時の面影をしのぶことができる。		
県	史跡	平賀源内生祠	ひらがげんないせいし		福山市鞆町後地字大明神	昭15.2.23			蘭学者平賀源内(1729～1779)が鞆の溝川家に寄宿した時，源内焼の製法を伝え，土の神・かまどの神・平賀源内大明神を三宝荒神としてまつれと言い残して去った。この生祠(せいし)は溝川氏が宝暦14年(1764)に祭ったもの。		
県	史跡	菅茶山之墓	かんちゃざんのはか		福山市神辺町川北字網付	昭15.2.23			菅茶山(寛延元～文政10年(1748～1827))は，名は晋師(ときのり)，字は禮卿(れいけい)，通称は太中，茶山は号である。安那郡川北村(現深安郡神辺町川北)で農業・酒造業を営む菅波樗平(すがなみちょへい)の子として生まれた。19歳の時京都の那波魯堂(なわろどう)に朱子学を学び，天明元年(1781)郷里で私塾を開いた。寛政8年(1796)福山藩は藩立の郷塾とし，公式には神辺学問所と呼ばれたが，一般には廉塾と称した。茶山は朱子学者で詩文に卓越し，藩史福山志料の編集を行った。当時，山陽・南海の諸国から来て学ぶ者が多く，頼山陽も門下生のひとりであった。今日，講堂・寮舎が茶山の居宅とともによく旧観を維持し郷塾としては数少ない遺例である。 なお，茶山は80歳で没し，黄葉山麓にその墓がある。碑文は頼杏坪(きょうへい)の撰ならびに書である。		
県	史跡	頼家之墓 ※頼は旧字	らいけのはか		広島市南区比治山町下組 多聞院境内	昭15.2.23			植田艮背(うえだこんぱい)の墓地に接して，頼春水・梅[84b0](ばいし)夫妻，頼杏坪(きょうへい)，山陽の子聿庵(いつあん)，孫誠軒，古樣(こばい)，成一と頼家一族の墓が並んでいる。 頼家は江戸時代後期に文運の盛んな竹原の紺屋の出身で，学問の家の誉れがある。春水は山陽の父で，天明元年(1781)広島藩儒となった。その詩文を編した春水遺稿7冊，意見書等関係文書を集成した春水遺響26冊がある。文化13年(1816)71歳で没した。春水の弟杏坪は，天明5年(1785)藩学問所に登用され，文化8年(1811)50歳を過ぎたころから郡代官・郡廻り・三次町奉行を歴任し，直接民政をつかさどり，一方，修史局を総裁して，芸藩通志159巻を編修するなど，地方文化の向上にも尽くした。天保5年(1834)79歳で没した。		

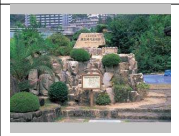
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	青目寺跡	しょうもくじあと		府中市本山町	昭15.2.23			府中市の北東，亀が岳（標高539m）の山頂西側にある七ッ池周辺に位置する。弘仁4年（813）四国屋島寺の青目上人の開基と伝えられる天台宗の山上寺院で，延喜年間（901～922）の頃には十二坊を数えるまでに至ったという。現在それらに相当する場所には，中御堂を中心に西，南，北の御堂とよばれる遺構が分布しており，建物の積石基壇や礎石などを残す。南御堂付近には，塔をはじめ多くの建築跡が分布するようであり，井戸なども含む。東御堂とよばれる場所は，前記の各遺構よりも東にはずれた位置にある。これは「続日本紀」にみえる備後常城（つねき）に関連した遺構の可能性も考えられ，ここでは南北に両翼のように張りだした石塁なども存在する。		
県	史跡	官立綿糸紡績工場跡	かんりつめんしぼうせきこうじょうあと		広島市安芸区瀬野川上瀬野字奥畑乙	昭15.11.10			明治初年，殖産政策の一環として綿糸紡績業の振興をはかるため，政府は当時綿花の産出が多かった愛知と広島に洋式紡績機を備えた工場を設立することにした。動力として水力を選んだため広島ではこの地に決まった。工場は，明治15年（1882）落成寸前に士族授産のため広島綿糸紡績会社に払い下げられたが，この工場が日本の紡績事業を刺激興隆させたことはいうまでもない。今日6反5畝（約6500㎡）の工場敷地には石垣が残るのみであるが，延々600mの水路と動力の中枢であった水車に通ずる水門余水の調節口などによって，往時の様をしのぶことができる。		
県	史跡	棲真寺定ケ原石塔	せいしんじじょうがはらせきとう		三原市大和町平坂字西ノ迫	昭15.11.10			棲真寺（せいしんじ）は，大和（だいわ）町内西南部の平坂地区の山中にあり，承久元年（1219）土肥実平（どひさねひら）・遠平（とおひら）父子が，遠平夫人（源頼朝の娘と伝える）妙仏を弔うために建てたという。弘安2年（1279）仏照禅師（白雲恵暁）が中興し，今日，鎌倉時代（1185～1332）の二十八部衆12体（県重文）が残されている。 定ヶ原の宝篋印塔（ほうきょういんとう）は，妙仏の母である寿庵尼（じゅうあんに）の墓と伝えられる。寿庵尼は，娘の妙仏の早世をいたみ，落髪して棲真寺に住み，安貞2年（1228）没したと伝えられる。石塔は高さ約1.5mで，鎌倉時代の様式をもつ。塔身を失ってはいるが，昭和39年（1964）の修理の際に新造追補している。		
県	史跡	毛利元就誕生伝説地（鈴尾城跡）	もうりもとなりたんじょうでんせつち（すずおじょうあと）		安芸高田市吉田町福原	昭15.11.10	本丸・南のくるわ・西のくるわ・北のくるわ・東のくるわ・台所やしき・井の段・土居の段など12段の遺構		鈴尾城跡は，毛利氏の一族福原氏の居城である。福原広俊（ふくばらひろとし）の娘は，毛利弘元（もうりひろもと）の室となり，興元（おきもと）・元就（もとなり）を生む。元就は明応6年（1497）3月14日，母の里であるこの城内で誕生したと伝えられている。 城跡には本丸・南の郭・西の郭・北の郭・東の郭・台所やしき・井の段・土居の段などの遺構がある。		
県	史跡	比婆山伝説地	ひばやまでんせつち		庄原市西城町熊野，油木 庄原市比和町三河内	昭16.3.10			比婆山，別名美古登（みこと）（1264m）の山頂は，古事記にいう伊邪那美尊（いざなみのみこと）を葬った「比婆山」であるとして古来信仰の対象となって来た。 なお，周囲にブナの純林（天然記念物），イチイの群落がある。		
県	史跡	亀山弥生式遺跡	かめやまやよいしきいせき		福山市神辺町道ノ上字中川	昭16.3.10 昭23.5.14（名称変更） 昭24.10.28（追加指定）	弥生時代前期（紀元前3世紀～紀元前2世紀ごろ）		神辺平野の中央やや北寄りに標高37mの亀山の独立丘陵があり，遺跡はこの丘陵（東西約250m，南北約350m）のほぼ全域に広がる。なお，史跡指定地はこの丘陵の南半部を中心とする地域である。 過去に昭和32年（1957）の日本考古学協会による発掘調査，昭和56～60年（1981～1985）の広島県教育委員会・県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。 遺物包含層の下層からはヘラ描きの沈線文や突帯をめぐらす弥生時代前期後半（紀元前2世紀）の土器が中心に出土し，その上層では櫛描き文様の中期前半（紀元前1世紀）の土器が出土し，ヘラ描き文様から櫛描き文様への転換を示す資料として注目される。丘陵上には弥生時代前期（紀元前3世紀～紀元前1世紀）の三重に巡る環濠（かんごう）や，その内側に弥生時代後期（紀元後1世紀～3世紀）の竪穴住居跡や前期～後期の貯蔵穴などの遺構がある。出土遺物は，土器のほか多量の石鏃（せきぞく），刃器，磨製石庖丁，鑿（のみ）形石斧，環状石斧，磨製石斧など，各種の石器が出土している。備後地方の初期の農耕生活を示す遺跡として重要である。 なお，環濠集落内ではあるが，丘陵の北頂部の第1号古墳（径28m）からは割竹形木棺をもつ粘土槨が検出され，三角板革綴短甲（さんかくいたかわとじたんこう）・鉄剣・鉄刀・鉄槍等が出土した。時期は5世紀前半と考えられる。また，南頂部の第2号古墳（径22m）からは箱式石棺が検出され，鉄器片が出土した。時期は5世紀代と推定される。 そのほか，斜面地を中心に古墳時代～中世（3世紀後半～16世紀）の遺物も出土している。		
県	史跡	有福城跡	ありふくじょうあと		府中市上下町有福字城山	昭16.3.10			足利尊氏が京都に幕府をたてて間もない建武3年（1336）6月に，青目寺（しょうもくじ）別当弁房らとともに備後国の南朝方の中心人物であった竹内兼幸（たけうちかねゆき）が拠った有福庄内の山城であるが，山内氏・長谷部（はせべ）氏などの攻撃を受けて落城したと伝えられる。 また，天正9年（1581）に有福元貞が毛利輝元から「有福要害」の普請と番衆の入城を命じられたことが確認される。		
県	史跡	天領上下代官所跡	てんりょうじょうげだいかんしょあと		府中市上下町字田中	昭16.3.10	石垣		元禄11年（1698）水野家が断絶した翌年，幕府は備前藩主池田綱政に，福山藩の検地を行わせ，5万余石を打ち出した。このため，幕府は，神石郡，甲奴郡，安那郡5万石余を直轄領として，元禄13年（1700）上下に代官所をおいた。やがて享保2年（1717），中津領に2万石が割かれたのを機会に，代官所は石見大森代官所支配に合わされ，その出張（でばり）陣屋と改められて，神石郡10ヵ村，甲奴郡12ヵ村を管轄した。その後，管下に多少の出入りがあったが，明治元年（1868）に及んだ。現在は町役場として利用されているが，周囲の石垣は往時のままである。		
県	史跡	瓢山古墳	ひさごやまこふん		庄原市本町字上野山	昭17.6.9	前方後円墳	長さ41m，後円部径26m，前方部幅17.8m，後円部高さ4m	庄原市上野公園北側丘陵の頂部（比高約70m）に位置する前方後円墳で，丘陵北西にひろがる沖積地を望んで築造されたものであろう。前方部を東にむけ，全長41m，後円部径26m，高さ4m，前方部幅17.8m，高さ約3.5mで，墳丘には葺石・円筒埴輪がみられる。内部主体は不明であり，前方部がやや細長めで後の加工があるかも知れない。古墳時代中期（5世紀）の築造と推定される。従来，本古墳が庄原市域最大の前方後円墳とみられていたが，その後の調査では全長40～50mに及ぶものが数基存在することが確認され，県北部でも有数の前方後円墳が集中する地域として知られる。なかでも掛田町の旧寺古墳は，瓢山古墳の西北に沖積地をはさんで対峙し，全長61.7mに達する。		

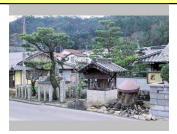
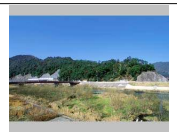
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	吉寺廃寺跡	よしでらはいじ		三次市吉舎町桧字西山	昭17.6.9	中世の廃寺跡，16個の礎石群		吉舎町檜の西，標高約500mの高位置に存在する中世の寺院跡と言われる。山頂部からやや南東にくだり三方を丘陵に囲まれた南に開いた浅い谷頭に，東西約20m南北約10mの平坦地を設け，そこに桁行五間，梁行三間の南面した建物跡が残る。桁の柱間は両端で約2.8m,その間約3m,梁の柱間はいずれも約2.8mで，南半部には50～60cm大の礎石がよく残っている。「芸藩通志」によると，寺跡の北西数町の場所に，鐘楼跡があるとされている。また，北東の谷には和智信濃守師実の菩提寺，能引寺があったという。		
県	史跡	植田艮背之墓	うえだこんぱいのはか		広島市南区比治山下組	昭17.6.9			植田艮背(うえだこんぱい)は字(あざな)玄筋，神儒一致を唱えた京都の山崎闇斎(やまざきあんさい)の高弟である。広島藩の中興の祖といわれた五代浅野吉長(あさのよしなが)に迎えられ，広島藩に神儒学を伝えた。山崎闇斎(やまざきあんさい)の垂加草全集三十巻は彼の編集になる。 艮背は藩儒として活躍するだけでなく，当時経済的実力を背景に学問に関心を示すようになった富裕町人層の教育にもあたった。享保20年(1735)，85才で死去。比治山の西麓の多聞院(たもんいん)境内に葬られた。		
県	史跡	楢崎正員之墓及関係遺跡	ならさきまさかずのはかおよびかんけいいせき		三原市西町，須波町	昭17.6.9	楢崎正員の墓，須波屋敷跡，須波波止場		楢崎正員(まさかず)は，元和6年(1620)，三原市西町のそろばん製造業を営む楢崎家に生まれ，家業に専念した。延宝元年(1673)，54歳で京都に上り，山崎闇斎(やまざきあんさい)の門に学び，学の奥義を究めて帰郷し，三原城主浅野忠義(あさのただよし)の知遇をえた。元禄9年(1696)に77歳で没し，大善寺に葬る。翁は晩年須波に隠居したが，この地の東風の強いのをみかね，私財を投じて波塘(はと)を築き，海運の便をはかった。今日その遺跡は翁の善功を伝えている。墓所，屋敷跡，波止が指定されている。		
県	史跡	唐崎常陸介之墓	からさきひたちのすけのはか		竹原市竹原町地蔵町字北屋敷	昭17.6.9			唐崎常陸介(1737～1796)，名は士愛，号は赤斎という。磯宮八幡(いそのみやはちまん)の神官であり，谷川士清(たにがわことすが)に学んだ。宝暦・明和(1751～1772)のころ，尊王論者として京都・九州の同士の間を往復した高山彦九郎(たかやまひこくろう)と提携して国事に奔走する。寛政8年(1796)，60歳のときに自殺した。		
県	史跡	小早川隆景墓	こばやかわたかかげはか		三原市沼田東町納所字米山	昭18.3.26	宝篋印塔	高さ1.75m	小早川隆景は，天文2年(1533)毛利元就(もうりもとなり)の三男に生まれ，安芸の国人領主竹原小早川家に養子に入った。やがて天文19年(1550)，沼田(ぬた)小早川家を継ぎ，兄の吉川元春(きっかわもとはる)とともに毛利両川(りょうせん)体制の一翼を担った。新高山城(にいたかやま)・三原城は隆景が築城・修築したものである。慶長2年(1597)，65歳で没し，米山寺にある小早川氏歴代の墓地に葬られた。墓は高さ1.75mの宝篋印塔(ほうきょういんとう)である。米山寺はほじめ巨真山寺(こしんさんじ)と呼ばれ，嘉禎元年(1235)に小早川氏の氏寺として創建された寺院である。		
県	史跡	水野勝成墓	みずのかつなりはか		福山市若松町 賢忠寺境内	昭18.3.26	五輪塔	高さ5.1m	水野勝成は，福山藩の初代藩主で福山城を築城し，芦田川のデルタに城下町を築いた。慶安4年(1651)，88歳で没し，菩提寺賢忠寺の境内に葬られた。水野家の墓地は，戦後の都市計画で賢忠寺と分断され，鉄道に沿って北側にある。勝成の墓は巨大な五輪塔で，高さ5.1mである。		
県	史跡	本庄重政墓	ほんじょうしげまさはか		福山市松永町字中ノ町岡 承天寺境内	昭18.3.26			重政は福山藩主水野氏の家臣本庄重紹の嫡子に生まれたが，家督を弟に譲り，兵法を修行した。島原の乱(1637～1638)に戦功を立てた後，高須村に隠棲し新開開発の志を立て，明暦2年(1656)柳津新開を，翌年深津新開を，また万治2年(1659)松永新開を築き，寛文7年(1667)までに新開のすべてを塩浜となし，松永塩田の基礎を作った。延宝4年(1676)70余歳で没し，自ら建立した承天寺に葬られた。本庄神社は重政を祭る社である。		
県	史跡	田辺寺塔跡	でんべいじとうあと		福山市津之郷町字大満寺	昭18.3.26			福山市の西郊，津之郷町坂部の南に張り出した低丘陵上に位置し，現在の田辺寺の南に接する畑から多量の古瓦類とともに九輪(県重文)，風鐸などが出土し，塔跡の存在が推定された。しかし，中心礎石も移動して田辺寺境内におかれており，正確な塔の位置，規模ならびに伽藍配置などいずれも明らかでない。伝承では養老5年(721)開基の和光寺の跡と伝えるが，出土の軒丸瓦，軒平瓦とともに平安時代(794～1184)の特徴を示している。田辺寺のさらに南方の傾斜地から低平地にかかる一帯は，弥生時代から平安時代(紀元前3世紀～12世紀)におよぶ遺構・遺物を出土するザブ遺跡があり，平安時代の緑釉(りょくゆう)陶器や多量の土師器の出土は，和光廃寺との関連を示す資料と言えよう。		
県	史跡	伝吉田寺跡	でんよしだでらあと		府中市元町字東	昭18.3.26	奈良時代前期に創建された寺跡		現在の府中市街地の北辺，芦田川が備後平野に出る左岸西端の山麓に位置する。従来は奈良時代前期(8世紀前半)の藤原宮式の軒丸瓦，忍冬唐草文軒平瓦(にんとうからくさもんのきひらがわら)ならびにへう描き人面瓦などを出土する寺跡として知られていた。昭和42年(1967)の調査によって，北に講堂跡の一部とその南東に一辺14.5mの塔跡基壇が検出され，金堂はその西に存在することが推測される。出土の瓦類には，あらたに川原寺(かわはらでら)創建時に共通する複弁蓮華文軒丸瓦などが出土し，大和地方との密接な関連が推測される。なお，藤原宮式の軒丸瓦は，このほか栗柄廃寺，小山池廃寺，宮の前廃寺など備南に広く分布する。心礎と考えられる石が，金龍寺境内に置かれている。		

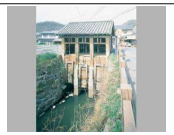
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	寺原・与谷・猿喰城跡	てらばら・よたに・さるばみじょうあと		（寺原城跡） 山県郡北広島町寺原 （与谷城跡） 同上 （猿喰城跡） 同上本地	昭18.3.26			南北朝の争乱に当って毛利貞親(さだちか)(安芸吉田庄地頭として入封した毛利時親の子)親衡(ちかひら)父子は，南朝方について忠勤を尽した。ことに親衡は，足利直冬や征西将軍懐良(かねなが)親王と気派を通じ，吉田庄を中心に気勢をあげた。 寺原城跡は興国2年（1341）及び正平22年（1367）に親衡が拠った所で，大朝庄の地頭吉川実経(きっかわさねつね)らに攻略された。 与谷城も親衡が親応元年（1350）と正平22年（1367）に拠った城で，最後に吉川実経に攻略されている。 猿喰城は観応元年（1350）親衡に呼応した山県為継(やまがたためつぐ)・壬生道忠(みぶみちただ)の本拠で，安芸国の守護武田氏信(たけだうじのぶ)によって攻略された。		
県	史跡	万葉集遺跡長門島松原 （桂濱神社境内）	まんようしゅういせきながとしままつばら		呉市倉橋町字前宮ノ浦	昭19.5.30			万葉集巻十五に，天平8年（736）遣新羅使(けんしらぎし)が安芸の国長門島船(ながとしまのふな)泊に停泊した時の歌，舟出の歌が八首よまれている。倉橋島は同地の八剣(やつるぎ)神社の文明12年（1480）の棟札に長門島と記され，長門崎，長門口の地名もあることから長門島に当るとみられる。倉橋の本浦は船泊に適し，推古天皇の代から奈良時代（710～793）にかけて幾たびとなく外国に使する船を造った所と伝え，江戸時代に至るまで造船で聞こえた。松原がつづく桂浜(かつらはま)神社の境内は歌意にかなう景勝の地で，今も昔ながらの風趣を保っている。		
県	史跡	下素麺屋一里塚	しもそうめんやいちりづか		三次市吉舎町吉舎字下素麺屋	昭19.5.30			慶長9年（1604），幕府は東海・東山・北陸三道に一里ごとに塚(つか)を設け里程とした。広島藩でも，寛永10年（1633）石見・出雲両街道の広さを7尺と定め，36町ごとに土石を積んで塚としエノキやマツの木を植えたが，廃藩後保護するものもなく，現存するものは稀である。この一里塚は福山から出雲に通ずる街道に造られたものの一つで，吉舎の町中にある。近年枯死した塚中央のクロマツは，周囲2.6m，高さ18mに達していた。		
県	史跡	中山一里塚	なかやまいちりづか		三次市吉舎町吉舎字中山	昭19.5.30			慶長9年（1604），幕府は東海・東山・北陸三道に一里ごとに塚(つか)を設け里程とした。広島藩でも，寛永10年（1633）石見・出雲両街道の広さを七尺と定め，三十六町ごとに土石を積んで塚としエノキやマツの木を植えたが，廃藩後保護するものもなく，現存するものははなはだまれである。この一里塚は福山から出雲に通ずる街道に造られたものの一つで，下素麺屋一里塚の東方一里の地点にある。塚のマツは枯死し，近年若木が植えてある。		
県	史跡	宮脇石器時代遺跡	みやわきせっきじだいいせき		福山市新市町常	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	旧石器時代～縄文時代早期		神谷川上流右岸の平地にむけて傾斜する比高約20mの丘陵端に位置し，現在品治別（ほんじわけ）神社の境内となる。縄文時代早期（約9,000～6,000年前）の押型文土器と細石器を出土した遺跡として知られているが，かなり大型の礫（れき）をふくむ包含層で，丘陵上手から二次的に堆積した可能性が高い。 縄文時代の遺物は，山形・楕円・格子目の押型文土器，撚糸文土器，無文厚手土器ならびにそれに伴う石鏃（せきぞく）など縄文時代早期中葉のものが中心である。 縄文時代以前の遺物としては，サヌカイト製の細石核・細石刃ならびに小型のナイフ形石が少量伴出するようで，旧石器時代終末（約20,000～12,000年前）およびそれ以降の過度的様相を示すといえる。		
県	史跡	山の神古墳	やまのかみこふん		福山市駅家町法成寺字田中	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	横穴式石室，片袖形	墳丘径14m，高さ4m 石室／長さ6.35m 玄室／長さ4.1m，幅2.9m，高さ3.3m 羨道／長さ2.25m，幅1.26m，高さ1.25m	芦田川中流域の主要古墳の一つで，JR駅家駅の北側丘陵端に位置している。前方後円墳とされているが，円墳とする説もある。墳丘は，径12m，高さ4mを測る。内部主体は横穴式石室で南に開口し，全長6.35m，玄室は長さ4.1m，幅2.9m，高さ3.3m，羨道（せんどう）は長さ2.25m，幅1.26m，高さ1.25mの片袖式で，玄室の側壁を持送ってアーチ状に近い天井部を構成している。出土遺物としては，金銅製丸玉2個分，鉄斧1，金銅製杏葉ならびに鉄地金張りの鏡材片2個分，方形飾金具，鉄針，須恵器・土師器片がある。6世紀中葉前後の古墳と推定される。		
県	史跡	大迫古墳	おおさここふん		福山市駅家町新市字平ケ市	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	古墳時代後期，横穴式石室	玄室／長さ5.75m，幅2.5m，高さ2.7m 羨道／長さ6m，幅1.9m，高さ2.1m 奥行11.7m	服部大池北西の，谷状の平地に接した丘陵末端に位置する。周囲は畑や道になって墳丘はほとんどないが，おそらく円墳であったと考えられる。現在内部主体の横穴式石室が露出し，全長11.7m，玄室は長さ5.7m，幅2.5m，高さ2.7m，羨道（せんどう）は長さ6m，幅1.9m，高さ2.1mの両袖式である。両側壁とも巨大な石をたてならべ，横穴式石室の規模としては，二子塚古墳に次ぐ規模をもち，備南の典型的な巨石墳である。玄室内から中空の金製環1，須恵器高杯2が出土しており，6世紀末の古墳である。		
県	史跡	大佐山白塚古墳	おおさやましらつかこふん		福山市新市町中戸手字白塚	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	円墳（横穴式石室）	石室／長7.8m，玄室は長さ3.75～3.88m，幅1.9m，高さ2.2m，羨道は長さ約4m	標高188mの大佐山頂上からわずかに南に下った高位置にあり，付近から芦田川中流の眺望は格別である。古墳は円墳（一説に方墳）と見られており，内部主体は巨大な切石を整然と積みあげた横穴式石室で，南向きに開口する。全長7.8m，玄室は長さ3.75～3.88m，幅1.9m，高さ2.2m，羨道は長さ約4mで高さ，幅とも玄室と大差なく，両者の境には両側に柱状の石をたて，それに鴨居状の石が横架し，玄室と羨道を分けている。石と石との間隙には，漆喰がつめられた痕跡がうかがえる。7世紀前半の古墳であろう。付近の傾斜面には，やや小規模の横穴式石室墳が数基分布するが，これには漆喰の使用は認められない。		
県	史跡	神谷川弥生式遺跡	かやがわやよいしきいせき		福山市新市町神谷川字向市内	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更） 昭44.5.27（一部解除）	弥生時代後期		新市町の東部，神谷川と芦田川の合流地点の北側，神谷川左岸に接した標高50mの丘陵上に位置する。弥生時代後期（1～3世紀）の土器を多量に出土することで知られ，「神谷川式土器」として広島県東部の弥生後期土器の標式とされている。昭和43年（1968）には，史跡指定地の上手の丘陵一帯から，竪穴式住居跡7のほか，貯蔵用竪穴などが検出され，集落を構成することが明らかとなった。史跡指定地はこれらの下手にあって，谷を埋めた極めて厚い遺物包含層となっており，下方では縄文時代晩期後半（約2,500年前）の遺物を含んでいる。出土遺物としては，少量の鉄片，砥石のほかは弥生土器で，壺，甕（かめ），鉢，高坏（たかつき）が中心となるが，やや大形の器台もある。		

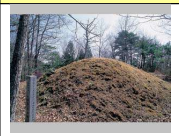
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	太田貝塚	おおたかいづか		尾道市高須町字出口，同字竹之端	昭24.8.12 昭48.12.18（一部解除）	縄文時代前期～後期（約6000～3000年前）		松永湾西部の標高約3mの微高地に位置し，かつては直接海浜に接していた縄文時代（約12,000～2,300年前）の貝塚である。古くから多数の人骨を出土して著名であるが，その所属時期はたしかでない。縄文時代の遺物としては，前期，中期，後期の土器があり，前期土器は貝層下の有機砂層に包含される。土器のほか多量の石鏃（せきぞく），石匙（せきひ），石錐（せきすい）やハイガイ・アガキ・アサリなどの貝類，獣骨などが出土し，狩猟・漁撈の生活を物語っている。なお昭和39年（1964）の調査では，遺跡の東半部に幅2.6m，深さ0.85mの溝状遺構が南北にわたって検出され，多量の古式土師器や製塩土器が出土した。現在，貝塚の一部は史跡公園として活用されている。		
県	史跡	松本古墳	まつもとこふん		福山市神村町松本字城ノ元	昭24.8.12 令和元.10.21（追加指定） 令和5.6.12（追加指定）	造り出し付円墳	一辺32m，高さ5m	松永湾中央奥の，北から南に向って延びる丘陵の先端部に位置する造り出し付円墳である。従来はこの地域に珍しい方墳とされていたが，昭和51年（1976）の測量の結果，径48～50m，高さ7m，北に幅17m，長さ7m，高さ1mの造出しがあることがわかった。また，内部主体は墳頂部南寄りに竪穴式石室があり，この古墳のものと思われる鉄剣や珠文鏡なども採集されている。石室はも1基存在する可能性もある。このほか水鳥形土製品が採集されており，5世紀後半の古墳と考えられる。松永湾には，このほか尾道市黒崎山古墳（全長約70mの前方後円墳），大元山古墳（全長約50mの前方後円墳）など前半期の主要な古墳が集中しており，瀬戸内交通の拠点の一つになっていたことが推測される。 令和元年に墳丘北側から東側にかけての部分が、令和5年に墳丘南側の部分が追加指定された。		
県	史跡	貞丸古墳	さだまるこふん		三原市本郷町南方字貞丸，字二本松	昭24.10.28	円墳（横穴式石室）	玄室／奥行4.93m，高さ2.15m， 家形石棺／長さ2.15m，幅1.15m，刳抜式	御年代古墳（史跡）の西南約500mの丘陵斜面に南面して築かれた円墳で，横穴式石室を内部主体とする。石室は羨道部が大きく破壊されており，玄室部の長さ4.37～4.93m，幅2.09m，高さ2.15mが残る。しかし，南端の両側の石が柱状に立てられ，それに鴨居状の石がわたされているところからすると，その先は羨道（せんどう）ではなく前室となる可能性もある。玄室内には，長さ2.15m，幅1.15m，高さ60mの凝灰岩製の刳抜式（くりぬきしき）家形石棺の身がおかれている。蓋の所在はあきらかでない。この凝灰岩製家形石棺は，兵庫県高砂市付近に産出する竜山石で，播磨から運びこまれたとみられている。7世紀前半頃の古墳と推定される。		
県	史跡	梅木平古墳	ばいきひらこふん		三原市本郷町下北方字梅木平	昭24.10.28 平24.1.26 （追加指定，名称変更）	7世紀初頭，横穴式石室	玄室／長さ13.25m，幅3.02m，高さ4.2m	本郷町の沼田川中流にそそぐ梨和川・尾原川の狭い谷間には，家形石棺などを納める特色ある横穴式石室墳が分布し，梅木平古墳はその東端の南面した丘陵端に位置する。墳丘は周辺が畑となり，規模は不明であるが円墳と思われる。県内では最大規模の横穴式石室を内部主体とし，現存の全長13.25m，奥壁幅3.02m，高さ4.21mで，入口部分が破損しているので，もう少し長くなろう。両袖式の石室で，玄室と羨道部の天井部の高さの差が著しい。7世紀初頭前後の古墳と推定される。墳丘の小堂には平安時代（794～1184）の仏像2体が安置され，古墳の東約200mには，白鳳時代（7世紀後半）の寺院跡である横見廃寺跡（史跡）がある。		
県	史跡	比治山貝塚	ひじやまかいづか		広島市南区比治山本町	昭25.3.22			比治山の南麓に位置する縄文時代（約12,000～2,300年前）の貝塚である。当時は太田川の三角州が発達しておらず，貝塚は広島湾奥の島の汀線付近にあったと思われる。戦時中の軍の工事によりその主要部分が破壊されたが，昭和23・24年（1948・1949）の調査では，地表下30cmに厚さ約1.5mの貝塚が確認された。貝層は，上・下の2層に分かれ，上層から縄文時代晩期前半（約2,500年前）の灰褐色磨研土器，下層から縄文や同心円状の磨消縄文をめぐらす縄文時代後期後半（約3,000年前）の土器などが出土している。石器としては，石鏃（せきぞく），石匙（せきひ），漁網に使用される石錘（せきすい）、自然遺物としては，シカの骨，タイの骨，ハマグリ，カキ，アサリ，シオフキなどの貝類が出土しており，狩猟や漁撈を中心とした生活が明らかになった。		
県	史跡	貞丸第二号古墳	さだまるだいにごうこふん		三原市本郷町南方字貞丸	昭25.9.16	円墳（横穴式石室）	石室／長さ5.1m，幅2.1m，高さ1.97m	貞丸古墳の北上手約20mの位置に，南面して築かれた円墳で，横穴式石室を内部主体とする。石室は羨道（せんどう）部が破壊されており，現存の長さ5.1m，幅2.12m，高さ1.97mで，石室の構造・規模・方向など貞丸古墳に共通するところが多い。内部に組合式（くみあわせしき）家形石棺が安置されていたといわれ，現在貞丸古墳の東にある石碑の台石に家形石棺の蓋が使用され，側石材も大日堂の踏石や墓地に散在する。石棺蓋には，本来大価の縄掛突起を有したものと推定される。石材は凝灰岩で，竜山石製と考えられる。7世紀前半の古墳と推定される。なお，貞丸古墳の南西方200mにある南方神社に，家形石棺の蓋石，底石，長側石などが存在するが，その出土地は明らかでない。		
県	史跡	猪ノ子古墳	いのここふん		福山市加茂町下加茂小字猪ノ子	昭25.9.16	円墳	直径14m，高さ3m 羨道／長さ約3.8m，幅1.7m，高さ1.25m 石郭／約2.8m，幅約1.1m，高さ0.95m	芦田川中流域の古墳のなかでは，谷奥の傾斜地に立地する。江木神社の南西端に，直径14m，高さ3mの円墳であるが，墳丘の形態・規模とも原形をとどめていない。内部主体は横口式石槨の前に羨道をとりつけた終末期のもので，石槨（せっかく）の長さ約2.8m，幅約1.1m，高さ0.95mで5枚の花岡岩の切石で組合せ，羨道（せんどう）部は長さ約3.8m，幅1.7m，高さ1.25mで，両側壁1枚，天井石2枚からなる。石と石の間隙には漆喰をつめた痕跡がある。7世紀代の古墳と考えられる。横口式石槨を内部主体とする古墳は，飛鳥地方を中心に分布しており，これからみると畿内地方との密接な関連を想定させる。		
県	史跡	熊谷氏の遺跡 伊勢が坪（塩が坪）城跡 高松城跡 土居屋敷跡 菩提所観音寺跡	くまがいしのいせがつぼ（しおがつぼ）じょうあと，たかまつじょうあと，どいやしきあと，ぼだいしょかんのんじあと〕		広島市安佐北区 大林 可部	昭26.4.6 昭45.1.30（追加指定，名称変更）			中世安芸三入荘を中心に活動した熊谷氏に関わる遺跡群である。伊勢が坪（塩が坪）城・高松城跡・土居屋敷跡・菩提所観音寺跡からなる。 伊勢が坪（塩が坪）城は，熊谷氏が最初に拠ったところで，高さ30mの丘の上にある土居形式の城である。上中下の三段及び後の段などの郭に分かれ，上段には井戸跡もある。拠点を高松城に移した後も隠居所として使われ，北側には菩提所の一つである蓮華寺跡がある。 高松城跡は，三入荘の南の入口に位置し，220mに及ぶ峻嶮な山城で，熊谷氏が戦国時代初期に拠点を伊勢が坪からここに移したものとみられる。山頂近くに本丸，二の丸，馬場，鐘の段，明覚寺跡など規模の大きい郭が配置されている。 土居屋敷跡は，熊谷氏が平生使用している屋敷，政庁跡である。周囲に堀をめぐらせた跡もみられ，正面と北側の一部に築地石垣が現存し，正面中央に門の跡もある。 菩提所観音寺跡は，巨石で築かれた石垣が現存する。現在小さい堂を残すのみであるが，堂内には熊谷氏の定紋を刻んだ室町時代（1333～1572）の須弥壇がある。また，南側に五輪塔，宝篋印塔が並ぶ墓所がある。		
県	史跡	伝清盛塚	でんきよもりづか		呉市音戸町字鰐浜	昭26.4.6			倉橋島と呉市警固屋（けごや）町との間にある海峡を音戸の瀬戸というが，この幅150mの狭い海峡を，平清盛（たいらのきよもり）が開削して航行の便をはかったと伝えられる。平清盛の供養塔と伝える清盛塚は，音戸の瀬戸の西岸の西岸倉橋島に近接した岩礁の上に石垣を築き，小島となしたもので，宝篋印塔（ほうきょういんとう）1基（高さ2.05m，室町時代（1333～1572）の作）が建てられている。今日清盛塚は埋立てのため，倉橋島に接するばかりとなり，昔日の面影はないが，潮流の速い音戸の瀬戸は今も変わらず瀬戸内海の要路となっている。		

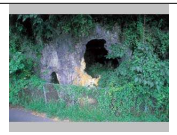
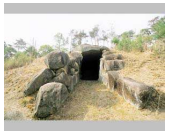
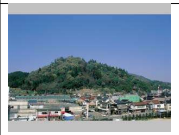
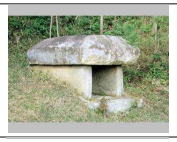
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	神辺本陣	かんなべほんじん		福山市神辺町川北字三日市北側	昭26.4.6 昭26.7.10（名称変更）			本陣は大名宿とも言われ，江戸時代（1603～1867），街道の宿場に置かれた大名・公家・幕府役人などの宿泊所である。建物は書院造で門・玄関・上段の間がある広大な規模であるが，この制度は，明治3年（1870）に廃止された。 神辺は江戸時代に備中（岡山県）矢掛（やかげ）と備後今津の中間に位置する西国街道の宿場町として栄え，その名残りはこの神辺本陣に偲ぶことができる。神辺本陣はもと七日市の東本陣と三日市の西本陣の二軒あったが，西本陣のみが現存している。延享5年（1748）に建てられた本陣の本屋は，御成の間・上段の間・三の間・札の間・玄関に至るまで参勤交代の諸侯が宿泊した当時の面影をとどめている。なお，屋敷全体を県史跡として指定し，建物は県重文として指定している。		
県	史跡	今高野山	いまこうやさん		世羅郡世羅町甲山	昭27.2.22 平11.4.19（追加指定）			甲山を中心とする世羅郡の東半一帯は12世紀末以来，高野山領大田庄であった。この庄園は地方豪族橘氏から平家に寄進され，平氏は後白河院を庄園領主とあおぎ平重衡が預所となっていた。平氏が滅亡すると文治2年（1186），院から高野山の大塔維持のため金剛峯寺に寄進され，高野山の経済をになう重要な庄園であった。今高野山龍華（りゅうげ）寺は大田庄経営の中心であり，弘法大師の御影堂が設けられ高野・丹生（たんじょう）明神も勧請され，十二院が一山をなしていた。今日，福智院，安楽院の子院が残り，木造十一面観音立像（重要文化財）をはじめ，当時以来の遺品が少なくない。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫（0847-22-0840）
県	史跡	野坂完山之墓	のさかかんざんのはか		東広島市西条町下見字蓮花寺	昭29.1.26			完山は，天明5年（1785）寺家村に生まれ，家業を継ぐため，広島，京都に留学し漢方医学を深めた。完山の修めた医学は，西洋医学摂取の土壌となった漢方医学の知識と技術であり，名声を聞いて教えを乞う者は日本各地に及んでいた。また，完山は，自然や社会の観察，認識に非凡なものを示しており，医書のほかに地誌「芸備大帳外史」などの著述がある。特に，生涯書き綴ったといわれる「鶴亭（かくてい）日記」56巻は文化史，社会経済史の貴重な資料となっている。 この墓は，嘉永6年（1853），完山の13年忌に門人百余名によって建てられたもので，門人江木鶴水（えぎかくすい）の撰文になる墓碑銘がある。		
県	史跡	石泉文庫及塾・僧叡之墓	せきせんぶんこおよびじゅく，そうえいのはか		呉市長浜胡子	昭29.4.23	居室／1階31.25坪，2階5坪（後補） 書庫／土蔵造2階建，蔵書2260巻 墓石		石泉（僧叡の雅号）は，宝暦13年（1763）山県郡戸河内の真教寺に生まれた。幼少から読書を好み，広島の芸轍（げいてつ）と呼ばれた真宗学侶の一派の指導者慧雲（ええうん）のもとで学徳を修めた。真宗で教義上の大論戦となった三業惑乱（さんごうわくらん）の際に，敢然として正説を主張した大瀛（だいえい）は従兄弟であり，兄弟子でもあった。寛政年間（1789～1801），広村の庄屋多賀谷氏は，石泉の学徳をしたって，この地に居宅と書庫を建てて招いた。石泉はここで多くの著述をなして全国から集まる学徒の教育に当たり，文政9年（1826）73歳で没した。墓は塾の北隣に立つ。村民も常に塾の維持保存に努めたので，建物と2,260巻の蔵書は，ともに，創設以来の状況を伝えている。		
県	史跡	備後安国寺	びんごあんこくじ		福山市鞆町後地	昭30.1.31			この寺は，もと金宝寺と称し愚谷和尚（ぐこくおしょう）が創建し，師の法燈円明国師（心地覚心）を開山に仰いだという。足利尊氏が元弘の乱（1331年）以来の戦没者の冥福を祈って国ごとに安国寺を設けたとき，この寺を備後の安国寺とした。一時衰退し天正7年（1579）安国寺恵瓊（あんこくえけい）が再興したが，大正7年（1918）釈迦堂（しゃかどう）の背後にあった本堂が焼失し，現在，釈迦堂1棟（重要文化財）と庭園の一部に石組やソテツの巨樹が残る。		
県	史跡	銀山城跡	かなやまじょうあと		広島市安佐南区祇園町，安古市町	昭31.3.30			安芸国の守護武田氏の城跡。武田氏は承久3年（1221）守護に補任されてから，天文10年（1541）滅ぼされるまで約300年間この山城に拠っていた。その後も大内氏ついで毛利氏が城番を置いた重要な城であった。馬返し・御門・千畳敷・観音堂跡・上高間・下高間・馬場などの曲輪が山麓から山頂までの諸所に残っている。		
県	史跡	木の宗山銅鐸銅剣出土地	きのむねやまどうたくどうけんしゅつどち		広島市東区福田町狐が城	昭31.3.30			遺跡は木の宗山の中腹200mの地点に所在する。現地は狐が城えぼし岩（高さ2m）の下手わずか一坪ほどの平地で，その前面は東に向かって急傾斜する。明治24年（1891）に立石の前に横たわる平石の下から，銅鐸1，銅剣1，銅戈（どうか）1が出土した。銅鐸は高さ19.0cmで，邪視文と呼ばれる特異な文様をもち，古式の銅鐸とされている。銅剣は長さ39.7cm，銅戈は長さ29.5cmでいずれも実用の武器から退化した型式である。これら弥生時代（紀元前3世紀～3世紀）の青銅器は，山腹の大立石の下から発見されたというその出土状態と，銅鐸の出土地としては西端にあり，しかも銅剣・銅戈などと共に出土する点などに特色があり，古くから研究者の注目をあびた。		
県	史跡	岩脇古墳	いわわきこふん		三次市粟屋町字柳迫	昭32.9.30	円墳	直径約31m，高さ約3.5m	三次市街の西方丘陵上にある円墳で，江の川合流地域を一眺にできる場所である。直径約31m，高さ約3.5mの規模で，葺石，埴輪などの外表施設はない。墳丘頂部には，長さ2.4m，幅70cm，高さ55cmの竪穴式石室を中心に，箱式石棺4基と石蓋土壙（いしぶたどこう）1基の6基の埋葬施設があり，家族墓的性格が強い。この古墳の東南に接して2基の小円墳があり，いずれも箱式石棺を主体とする。		
県	史跡	若宮古墳	わかみやこふん		三次市十日市町花園	昭32.9.30	前方後円墳	全長約39m，高さ3.5m	三次駅南東の丘陵頂部から南並びに西の傾斜面に分布する若宮古墳群（25基）の主墳で，丘陵頂部の南西端に前方部を南に向けて位置する前方後円墳である。全長約39m，前方部幅約16m，高さ2.5m，後円部径約22m，高さ3.5mで，墳丘には葺石（ふきいし）がめぐらされ，前方部がやや低平な整美な原形を残している。埋葬施設は，未調査で不明である。三次盆地の前方後円墳の中では，古式の形態的特徴を示しており，5世紀前半若しくはそれ以前に位する可能性もある。宅地造成で破壊された西斜面の小円墳には，箱式石棺を内部主体とするものもあり，鉄製釣針1が出土している。西に江の川合流地点をはさんで，岩脇古墳群が望見される。		

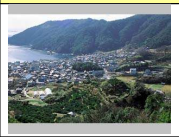
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	日光寺住居跡	にっこうじじゅうきょあと		三次市十日市町字大久保	昭32.9.30	古墳時代後期の住居跡（竪穴住居跡）	方形（一辺4.5m，深さ30～40cm）	若宮古墳，花園遺跡の所在する同一丘陵の東南傾斜面に位置し，日光寺の参道工事によって，古墳時代の竪穴式住居跡3棟分がほぼ東西に並んで検出された。住居跡の規模は一辺4.5m（第1号），4m（第2・3号）で，地面を約40cm掘り下げ，4本柱によって構成される。中央に炉跡があり，北辺の中央部に竈（かまど）が設けられ，第1号では煙道も存在したと思われる痕跡がある。出土遺物には，土師器・須恵器・土製紡錘車などがあり，とくに第1号住居跡では土師器のみが出土し，第2号，第3号より古い可能性がある。出土須恵器の形態からみると，6世紀末頃の時期が想定される。なお，同一丘陵の東寄りには，同様な時期の横穴式石室が分布する。		
県	史跡	因島村上氏の城跡 長崎城跡 青木城跡 青陰城跡	いんのしまむらかみしのしろあと （ながさきじょうあと，あおきじょうあと，あおかげじょうあと）		尾道市因島土生町 尾道市因島重井町 尾道市因島中庄町・田熊町	昭32.9.30			中世瀬戸内海中央に勢威をふるった因島村上氏の主要な城跡群である。 因島の南端にある長崎城跡は，村上氏の燧灘（ひうちなだ）方面に対するもので最初の拠点と考えられるが，現在，日立造船敷地内にあり，遺構はほとんど失われている。 島の北端にある青木城跡は向島の余崎城と共に布刈（めかり）瀬戸を見張る城として利用され，標高50mの本丸を中心に東の大手に向かって郭が連なる。なお，城麓には的場・裏木戸の地名を伝える。 島の中央の青陰城跡は，標高275mの山頂に位置し各要衝を指揮する拠点になっていたと思われ，三の丸を西端に，東へ郭が並んだ城跡である。城麓には大手・裏木戸・陣屋・水落などの地名を伝える。		関連施設：水軍城資料館（0845-24-0936）
県	史跡	頼惟清旧宅 ※頼は旧字	らいこれすがきゅうたく		竹原市竹原町字本町北	昭32.9.30	母屋／重層屋根入母屋造，本瓦葺，塗りごめ造 離れ座敷／単層屋根切妻造，本瓦葺，塗りごめ造		惟清（これすが）は名を又十郎といい，文運の盛んな竹原の町に紺屋を営んでいた。和歌をよく詠じ，天明3年（1783）77歳で没した。その子春水（山陽の父）・杏坪（きょうへい）は，共に学者として名高く広島藩の儒官となった。また二男の春風は竹原の家を継ぎ，医業をこととした。今日，竹原の旧宅は，頼家発祥の地として旧状を保っている。旧宅は，重層屋根，入母屋造，本瓦葺の主屋と，南に接する単層屋根，切妻造，本瓦葺の離れ座敷からなっており，双方とも塗籠造（ぬりごめづくり）である。主屋の道路側八畳の間が紺屋の店であったものと思われる。		
県	史跡	牛田の弥生文化時代墳墓	うしたのやよいぶんかじだいふんぼ		広島市東区牛田早稲田 早稲田神社境内	昭33.3.13	土壙墓	直径1.3m，深さ1.5m	太田川河口の三角州を望む早稲田山（標高約50m）の東斜面に位置する。昭和32年（1957），早稲田神社の再建工事の際に発見された弥生時代中期後半（約2,000年前）の土壙墓（どこうぼ）である。土壙は上縁の直径1.5m，深さ1.5mで，底には20～30cm大の石がすり鉢状におかれていた。土壙の底から70～80cm上部から，頭蓋骨，下顎骨（熟年男性）の一部が検出された。円筒形の土壙のなかに，座位屈葬の形で埋葬したものと推定される珍しい例である。土壙の上面には，ハマグリ・カキなどを中心とする小貝層があり，弥生時代中期後半の土器片や石鏃（せきぞく）が出土した。なお，西側傾斜面には，縄文時代早期（約9,000～6,000年前）の遺物包含層が分布し，押型文土器や石鏃などが多数採集された。		
県	史跡	湯之山旧湯治場	ゆのやまきゅうとうじば		広島市佐伯区湯来町和田宇上湯之山 湯之山明神境内	昭33.8.1			湯ノ山温泉の湧出は，富士山が大爆発した宝永4年（1707）のことである。寛延元年（1748）には盛んに湧き出たので藩主浅野吉長（よしながの）の知るところとなり，翌2年（1749）には，藩儒堀正脩（ほりせいしゅう）も来遊して「霊泉記」を著わした。霊験著しく，領内領外よりの入湯者は旬間千人に達することも少なくなく，37軒の宿屋があわただしく建築されるなど活況を呈した。藩も湯所役人を任命して入湯の監督，湯所の保全にあたっていた。 現在では，旅館は数軒に減じているが，岩壁を掘削した湯ぶねからは，温度20度のラジウム泉が湧き出ており，旧来の湯坪，湯屋，湯ノ山神社の諸施設は当時の姿をよく伝え保存されている。		
県	史跡	馬取遺跡	うまとりいせき		福山市柳津町馬取	昭34.1.29	縄文時代中期～後期		松永湾沿岸には，多くの縄文遺跡が分布し，馬取遺跡はその東半部の主要遺跡である。標高10m以下の低平な丘陵端にあり，かつては直接海に臨んでいたと考えられる。遺跡は東西二つの貝塚と南の遺跡包含層からなり，東貝塚では縄文時代中期・後期（約6,000～3,000年前），西貝塚では縄文時代後期，遺物包含層は縄文時代早期から晩期（約9,000～2,300年前）までの遺物を含むが，中心は中期・後期である。縄文土器のほか石鏃（せきぞく）・石匙（せきひ）・石錐（せきすい）などを出土し，古墳時代遺物では，製塩土器が注目される。この遺跡から出土する縄文時代後期末の土器は，「馬取式土器」と称され，瀬戸内海地域の標準土器とされる。現在遺跡の大部分は，土取り工事によって壊され，東貝塚の一部が保存される。		
県	史跡	下筒賀の社倉	しもつつがのしゃそう		山県郡安芸太田町下筒賀字中神原	昭36.11.1	2間×2間半，茅葺土蔵		安永8年（1779），広島藩は，飢饉に備えて町・村ごとに社倉法を実施させた。この社倉蔵は山県郡下筒賀村で社倉法実施に伴い設けられたもので，4坪程の小規模なものであるが，位置・構造共に建築当初の状態を伝え，保存も良い。天保8年（1837）の飢饉に際しては，この社倉の救用穀全部が放出され効果をあげたと記録に残っている。内側の壁には「天保六年未七月五日麦納，木坂組」（朱筆），「弘化五申年三月六日御面永貸穀貸付」（黒筆）などの落書があり，その運営の仕方が察せられる。 ※弘化5年＝1848年		
県	史跡	帝釈峡馬渡遺跡	たいしゃくきょうまわたりいせき		庄原市東城町帝釈始終宇南久玉山	昭38.4.27	縄文時代		帝釈川支流の馬渡川右岸にある，石灰岩の岩陰遺跡である。昭和36年（1961）の林道工事によって発見され，これが帝釈峡遺跡群発掘調査の端緒となった。岩陰にそった長さ約10m，厚さ約5mにわたって，旧石器時代末期から縄文時代前期（約12,000～5,000年前）に及ぶ五つの文化層が確認されている。特に第五層では横剥ぎの刃器とオオツノジカが出土し，第四層では石槍・石鏃及びわが国最古の土器グループに属する繊維を含む土器，オオツノジカ，カワシンジュガイなどが出土し，旧石器時代から縄文時代への推移をよく示している。第四層のオオツノジカの出土は，それが沖積世（約12,000年以前）にも生棲し狩猟対象となったことを示し，さらにカワシンジュガイは，貝の採取の開始を暗示する。		
県	史跡	山家一里塚	やまがいちりづか		三次市山家町神之瀬	昭40.4.30			幕府が，慶長9年（1604）五街道に一里塚をおいたのにならい，広島藩では，寛永10年（1633）幕府の巡見使派遣に先立って，西国街道や，脇街道の整備に乗り出し，一里塚などを作った。この一里塚は，三次から布野を経て赤名峠にぬける雲石路にあるもので，西側の塚は失われている。東側のものは，塚及びその底部にある湧水の遺構が比較的よく現存している。上部にそびえるクロマツは，新道建設のため一部根を切断されているものの，根張り周囲17.20m，根回り周囲3.30m，胸高幹囲2.80m，樹高18.0mで「蟹足の松」の名で親しまれている。		

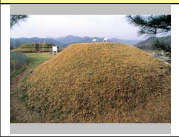
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	地蔵河原一里塚	じぞうがわらいちりづか		広島市安佐北区可部下町屋横川	昭40.4.30			古い石州街道は，今日のように亀山，飯室及び鈴張を迂回せず，南原峡沿いに進み，可部峠を越えて現在の山県郡北広島町本地に抜けていた。かつてはこの街道に沿って一里塚が置かれていたが，今日，ほとんど消滅し現存するものは珍しい。この地蔵河原一里塚は，現在の路面が相当地上げされているため，塚の原型は失われている。		
県	史跡	馬屋原重帯の寿蔵碑	まやはらしげよのじゅぞうひ		福山市駅家町向永谷第5番字堂奥	昭40.4.30	方柱型花崗岩製		重帯は宝暦12年（1762）当地の庄屋の家に生まれ，家業の農業に励むかたわら，史書を読み著作を好んだ。晩年にいたり学問に専念し，自ら塾を開き子弟の教育に当たった。また，福山地方の史書として著名な「西備名区」90巻を独力で著す偉業を成し遂げ，天保7年（1836）没した。この碑は，天保2年（1831）10月門人たちが彼70歳の時，業績を偲んで建立したもので，方柱型花崗岩製である。		
県	史跡	杭の牛市跡	くいのうしいちあと		三原市久井町江木字亀甲山	昭41.12.8			この牛市跡は，毎年9月，10月，11月の3回，市が開かれ数多くの牛馬が売買されていたところである。文献によれば，江戸時代初頭の延宝年間（1673～1681）の頃から市として確立されたものと言われる。近くには，牛馬宿と呼ばれる家も残っており，また，丘陵上には伯耆大仙神社の分霊と言われる大仙神社が祀られている。		
県	史跡	亀井尻窯跡	かめいじりかまあと		庄原市上原町	昭42.5.8	奈良時代の瓦窯跡，平窯	全長3.25m，幅最大2.0m，高さ0.3m以上	庄原市西郊の盆地北側丘陵の先端近くに位置し，窯は小さな谷に直交して築かれている。全長3.2m，最大幅2.0mで，羽子板状の平面形をなした平窯で，西側が燃焼室，東側が焼成室となり，四本のロストル（分焔柱）が残るが，両者の床面の差はなく，やや特異な形態である。窯の中から格子目・縄目のたたき目をもつ平瓦及び複弁の軒丸瓦が出土し，とくに軒丸瓦はいわゆる「水切り」をもつもので，三次市寺町廃寺に共通した形態が注目される。窯跡の西側には「法塔崎」と称せられる平担な丘陵がつらなり，中央に基壇状の高まりがあり，その縁辺から窯跡と同様な瓦が出土する。遺構の性格は明らかにされていないが，これに関連した遺跡と推定される。		
県	史跡	平賀氏の遺跡 御薗宇城跡 白山城跡 頭崎城跡 平賀氏の墓地	ひらがしのいせき（みそのうじょうあと，はくさんじょうあと，かしらざきじょうあと，ひらがしのぼち）		東広島市高屋町	昭44.4.28			現在の東広島市東北部を中心に安芸南部で活動した国人領主・平賀氏に関係する遺跡群である。館城形式の御薗宇城跡を始め，中世末期（16世紀前半）の典型的山城跡である頭崎城跡，同じく中世末期の白山城跡や平賀氏の墓地が含まれる。 御薗宇城跡は，築城年代は明らかでないが，平賀氏系譜によれば少なくとも弘安元年（1278）12月以前に築城されたと考えられており，「土居の内」形式の典型的なもので外観は馬蹄型，高さは約20mで地方武士の館城跡としては比較的規模が大きいものである。 白山城跡は，文亀3年（1503）に築城したといわれ，単純でしかも天然の利をいかしている山城である。また，城の近くには武士の屋敷地だけでなく，市場が営まれていたなど近世城下町への過渡的性格をもっている。 頭崎城跡は，平賀氏系譜によれば，大永3年（1523）戦国争乱期に対処するため築城されたとされている。城跡は極めて峻嶮な地を利用し，しかも各段が有機的につながっており典型的な山城である。麓には，屋敷跡や井戸跡，大工屋敷などの跡が残っている。 平賀氏の墓地は，廃明道寺跡のなかに，数多くの宝篋印塔や五輪塔が残っている。		
県	史跡	五龍城跡	ごりゅうじょうあと		安芸高田市甲田町上甲立五龍山	昭46.4.30			常陸の守護であった宍戸氏が，南北朝時代（1333～1572）に安芸国高田郡甲立に移って拠った山城である。毛利氏の郡山城とは4kmを隔てるのみで，毛利，宍戸両氏の争いが絶えなかったが，元就が和平策をとり，その娘を宍戸元源の孫隆家に嫁して以後，この城は毛利氏の東の藩塀として重きをなした。今日残る山城の規模に整ったのはこの頃である。城は，南と北側は江の川，本村川を自然の濠となし，西側には深い堀切を設けている。山城全体の大きさに比べて郭の数は多く，東の尾崎丸から西の本丸に至るまで10余郭が配置されている。また郭の間には，石垣，堀切が各所に存する。		
県	史跡	六の原製鉄場跡	ろくのはらせいてつじょうあと		庄原市西城町油木	昭46.7.30	砂鉄の採取から製鉄までの遺構		六の原製鉄場跡（たたら跡）は，県民の森入口の東西を渓流に挟まれた低平な丘陵上に位置する。北側には金屋子神社があり，西の渓流を約100mさかのぼった左岸には，床に木を張る鉄穴洗しの洗池2か所が残り，砂鉄の採取から製鉄までの遺構が分布する。たたら場は周辺部が削平され，高殿ならびに炉は残っていないが，その地下構造の本床と一対の小舟が明らかにされている。地下構造は，「鉄山秘書」に見られるものより簡略であり，赤目砂鉄を使用する場合の特徴であろうか。文献によると，近世末から明治時代初期まで操業されている。なお，本遺跡の西北や下流の一の原などにもたたら跡が分布しており，後者では小舟が検出された。		
県	史跡	甲山城跡	こうやまじょうあと		庄原市本郷町	昭46.12.23			戦国時代（16世紀）に出雲の尼子氏，安芸の毛利氏と肩を並べた備後国北部の有力国人領主山内首藤氏が本拠を置いた山城である。同氏は，地頭庄の地頭として鎌倉時代末（14世紀前半）にこの城を築いてからのち毛利氏に帰属し，慶長5年（1600）に長門国に移るまでこの城に拠っていた。 城の北部は西城川が流れ，南は高山門田（こうやまもんでん）と呼ばれた水田をもった谷盆地に臨んでいる。この城の規模は大きく，多くの郭が各支尾根に連なっている。		
県	史跡	木村城跡	きむらじょうあと		竹原市新庄町	昭48.3.28			木村城跡は，竹原小早川氏が本拠とした山城跡である。小早川氏は，鎌倉時代の初め（13世紀前半）沼田庄の地頭職を(え)て相模国の本拠から西遷し，承久3年（1221）に起こった承久の変の後に，竹原小早川家が創設され，正嘉2年（1258），茂平の次子政景が都宇・竹原庄に分立した。さらに応仁の乱（1467～77）後は惣領家をしのぐ勢力となり，13代隆景のとき沼田本家を相続し，本拠を沼田高山城に移した。 城跡は，本丸，二の丸，三の丸など12以上の郭からなり，井戸，土塁跡なども残っている。北側は，末宗川，西側は賀茂川に狭まれた天然の要害となっている。		

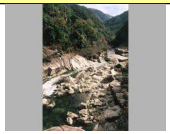
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	大浜の社倉	おおはまのしゃそう		呉市豊浜町大浜字牛原	昭48.3.28	間口3間，奥行2間，本瓦葺		間口三間，奥行二間で，面積は19.8㎡(六坪)の床張りの社倉蔵である。 安永8年(1779)，広島藩は飢饉に備えて社倉法を実施させたが，この社倉蔵は豊田郡大浜村の社倉法の実施に伴い設置されたものである。 柱材はクリの木，梁材はクスの木を使用した本瓦葺である。		
県	史跡	土師大迫古墳	はじおおさここふん		安芸高田市八千代町土師字大迫	昭48.3.28	円墳(横穴式石室)	径12m，高さ約3m 横穴式石室：全長5.56m，最大幅1.88m，最大高1.78m	現在，土師ダム河川敷内に存在するが，かつては江の川左岸の丘陵端に位置した。直径12m，高さ約3mの円墳である。内部主体は胴張り長方形の平面をなした横穴式石室で，全長5.56m，最大幅1.88m，最大高1.78mで，その規模は土師地区の古墳の中では大きい部類に入る。石室内面に赤色顔料の塗られ，県内では唯一の例である。文様をなすかどうかは明瞭ではなく，むしろ全面に塗布された可能性が強い。遺物としては，須恵器(杯・高杯・平瓶など)，耳環，勾玉，ガラス小玉，鉄鏃など多数が出土し，6世紀後半の特徴を示す。石室は保存処理をしたのち，砂で埋め戻され保存されている。		
県	史跡	畳谷弥生遺跡群	たたみだにやよいいせきぐん		広島市東区上温品字畳谷	昭49.4.25	弥生時代終末期～古墳時代初頭，竪穴式住居4，貝塚1，土壙9，壺棺墓1		温品川左岸の北から南にのびる標高100m前後の丘陵尾根上に位置し，弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀)にかけての遺跡群である。遺跡は尾根の東部，中央，西部の3群からなり，各群には住居，貝塚，墳墓などがあり，それぞれ完結した生活単位を構成する。現在，県立安芸高校の敷地内に県史跡として保存されているのは東群で，竪穴式住居跡4，土壙(どこう)および土壙墓9，壺棺1，貝塚1からなり，環境整備を行って公開している。		
県	史跡	恵下山・山手遺跡群	えげやま・やまていせきぐん		広島市安佐北区落合3丁目，真亀3丁目 (恵下山遺跡)字真亀 (山手遺跡)字山手	昭49.4.25			太田川下流左岸には，標高100m前後の丘陵が河岸にまで迫っている部分が多い。このような丘陵を対象とした高隣ニュータウンの造成地内から，各種の遺跡が検出されたが，そのうち重要な恵下山遺跡群，恵下山城跡及び山手遺跡群の3箇所が，県史跡に指定保存されている。 恵下山遺跡群，山手遺跡群は，弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀)にかけての集落跡で，竪穴住居跡・土壙・古墳などが検出されている。 恵下山城跡は単郭の城跡で，背後と尾根先端に堀切が配されている。出土遺物から14世紀後半頃の城跡と考えられる。		
県	史跡	西願寺山墳墓群	さいがんじやまふんぼぐん		広島市安佐北区口田2丁目字西願寺	昭49.4.25	竪穴式石室6，箱式石棺1，土壙墓14		太田川下流左岸の丘陵尾根上に築かれた墳墓群で，丘陵頂部から尾根の平坦な部分5か所にわたって分布していた。現在は，方形台状に削り出された下端部2か所の竪穴式石室6，箱式石棺1，土壙14が保存されている。竪穴式石室は，太田川から運びあげた径20～30cmの円礫(河原石)で築き，石室上面がひろがり，蓋石の存在しない特異な形態である。石室内や墓域内から鉄器類(剣・鑿(のみ)・斧・鎌など)や土器類が出土しており，特に鉄斧は扁平な鋳造品で，我が国では類例は少ない。弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀)にかけての，地域的な特色の強い集団墓である。下流左岸約2kmの丘陵上には三角縁神獣鏡を出土した中小田第1号古墳がある。		
県	史跡	鷲尾山城跡	わしおやまじょうあと		尾道市木之庄町木梨	昭52.3.4			建武3年(1336)，足利尊氏に従い九州多々良浜(たたらはま)(博多)の戦いで戦功をたてた備後の豪族杉原信平・為平兄弟が木梨13ヶ村を領知し，翌年木梨山に鷲尾山城を築いて以来250年間，木梨杉原氏の本城として盛衰をみた山城の跡と伝えられる。 東側の木梨川および西側の谷川を天然の堀とし，標高320mの険しい山を利用したこの山城はよく保存されており，面積880㎡の本丸をはじめ二の丸・土塁跡・帯曲輪・出丸(馬場跡)および南側に4段と北西側に8段の曲輪が残っている。		
県	史跡	三玉大塚古墳	みたまおおつかこふん		三次市吉舎町三玉字大塚	昭53.10.4	帆立貝形古墳(竪穴式石室)	全長41m，後円部径33m，後円部高さ8m，造出部幅15m，造出部高さ2.2m	JR「吉舎駅」北東にある丘陵頂部(比高約70m)に所在する帆立貝形古墳である。全長41m，直径33m，高さ8mで，北に幅15m，長さ13m，高さ2.2mの造出部がある。周囲は周堤がめぐらされ，墳丘は20～30cm大の葺石(ふきいし)でおおわれ，円筒埴輪がめぐらされる。内部主体は盗掘によってその大部分が破壊されているが，竪穴式石室であったと考えられる。出土遺物としては，鏡2面を始めとし武器(刀・矛(ほこ))，武具(短甲等)，馬具，玉類などがあり，東京国立博物館に所蔵されている。5世紀後半の古墳と推定される。備北地域では，帆立貝式の形態をなす古墳がかなり分布しており，その一つである。		関連施設：吉舎歴史民俗資料館 (0824-43-4400)
県	史跡	草深の唐樋門	くさぶかのからひもん		福山市沼隈町草深	昭55.1.18			沼隈町の南西部にある草深の南端に「磯新涯」という干拓地がある。福山藩の財政施策として寛文年間(1661～1673)の頃およそ50haの干拓が行われたもので，この際に山南川の川口を堰止め，造成された新涯地への農業用水調整のために造られたのが，草深の唐樋門である。 堤防の東側の一角に，がっしりと石垣を積み上げ，水路に石柱や大きな木の柱によって樋門を組み上げ，巻きろくろによって用水を調整した施設で干拓史の研究上，貴重な産業遺跡である。		
県	史跡	曽根田白塚古墳	そねだしらつかこふん		福山市芦田町下有地字曽根田	昭56.4.17			標高約100mの尾根頂上付近に位置する。墳丘は比較的良好に遺存している。 本古墳の特色を挙げると， 1　主体部の石室に対して封土がきわめて小規模である。 2　石室は全て切石を使用し，しかも極めて巨石を割って天井石・奥壁，側壁等いずれも一枚石か，せいぜい二個で築造し，玄室側壁の一方はわざわざ一枚石に割れ目を入れて左右の均衡を保ち，羨道(せんどう)部側壁も左右相称を意識している。 3　側壁や奥壁と天井石を安定化するため，天井石の接合部にくり込みを入れ，石室を構成する個々の石材の接合部に，しっくいをつめ込んでいる。 4　羨道部より玄室部分がせばめられ石棺状を呈するが，床石はなくて，なお石槨(せっかく)状であり，いわゆる横口式石槨をなしている。 以上の特色をもつことから，この古墳は大化改新以後の薄葬令が意識された古墳終末期(7世紀後半)のものと推測される。		

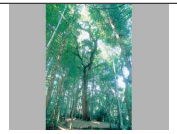
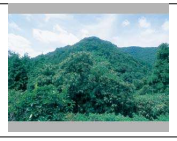
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	犬塚第一号古墳	いぬづかだいいちごうこふん		庄原市東城町新免	昭56.4.17	6世紀中頃の円墳（片袖式横穴式石室）	円墳／径約15m，高さ約3m 石室／全長3.6m，幅1.9m，高さ1.4m	犬塚第1号古墳は，直径約15m，高さ約3mの円墳で，埋葬施設に片袖式横穴式石室をもつ。石室の規模は全体に小振りの作りではあるが，正方形に近い平面の玄室をなし，大きく張りだした片袖部や狭くて短い羨道部や，一部に小口積みをなし持送りの著しい壁面の構成などは古式の特徴を示しており，6世紀前半から中葉にかかる時期と考えられる。石室内からは多数の玉類や耳環，鉄器類（剣など），須恵器が出土した。備後北部への横穴式石室の導入時期や系譜を考える上で重要な古墳である。		
県	史跡	山部大塚古墳	やんべおおつかこふん		安芸高田市吉田町山部字甲山	昭56.4.17		円墳／径約13m 玄室／横幅3.5m，長さ2m、高さ2.3m 羨道／長さ4m，幅1.6m	吉田盆地の北方，山部の谷の最奥部の南面する尾根の斜面に位置する径13mの円墳である。内部施設は，南西の谷間に向って開口する横穴式石室で，玄室は横幅3.5m，長さ2m，高さ2.3mの平面長方形をなす。羨道（せんどう）部は長さ4m，幅1.6mで，玄室と羨道の形がいわゆる「T字形」の平面形をなす珍しい形態である。 出土遺物はかつて羨道付近から出土したといわれる須恵器長頸壷（すえきちょうけいつぼ）があり，7世紀のものと考えられる。		
県	史跡	下本谷遺跡（三次郡街跡）	しもほんだにいせき（みよしぐんがあと）		三次市西酒屋町善法寺	昭56.11.6			中国自動車道「三次I．C」の南の丘陵上に位置する。 昭和49年（1974）に道路建設に伴う発掘調査によって，4時期にわたる堀立柱建物跡18棟，柵5条，土坑などが検出された。これらは正殿を中心にコの字形に建物を配し，これを柵で囲んだもので，地方官衙庁院（かんがちょういん）部の整然とした建物であることが明らかとなり，本遺跡は古代の三次郡街跡とみられる。出土遺物は，緑釉陶器（りょくゆうとうき），須恵器，土師器，須恵器転用の硯などがある。 道路西部の丘陵頂部のやや平坦な場所では，今からおよそ2万年以上前に堆積した姶良（あいら）火山灰層の下部あたりから流紋岩製，水晶製などの石器や剥片類（はくへんるい）が出土している。		
県	史跡	横路遺跡	よころいせき		山県郡北広島町新庄	昭57.10.14	弥生時代前期を中心とする集落跡		横路遺跡は，江の川を臨む河岸段丘上に位置する。昭和56年（1981）に行われた発掘調査によって弥生時代前期（約2,300～2,100年前）の袋状竪穴土壙（穀物貯蔵穴）群や竪穴住居跡等が検出され，中国山地で最も早く農耕生活を営んだ遺跡の一つであることが判明した。弥生時代前期の石器工房（工作）跡では，チャートやメノウを原石に用いており，県内でも類例が少なく特筆される。出土遺物には，弥生時代前期の土器（壷・甕），石器等があるが，木葉の文様を描いた壷型土器は，中国山地では出土例の少ない貴重なものである。		
県	史跡	酒屋高塚古墳	さかやたかつかこふん		三次市西酒屋町	昭57.10.14	帆立貝形古墳（竪穴式石室）	径約34m，高さ約7mの円墳に造出し付設	古墳は，三次盆地西南方の西から東へ延びる丘陵先端部に位置する。北側は，はるかに三次市街地をのぞみ，南側は緩やかな谷間の低平地を控えている。古墳は，径約34m，高さ約7mの円墳の西側に造り出しをもつ全長40m級の帆立貝形古墳である。埋葬施設は，後円頂部に構築された割石積みの竪穴式石室である。しかし，戦前の昭和16年（1941）に盗掘されたため，現在では石室の一部しか残っていない。墳丘には埴輪がめぐらされ，石室内部から鏡，鉄刀，鉄鏃，鉄釘などが出土したとされる。鏡は中国製の画文帯神獣鏡で宮崎県持田古墳や熊本県江田船山古墳，三重県神前山古墳などから出土した鏡と同型の鋳型で鋳造されたものといわれる。5世紀後半の古墳と考えられる。		
県	史跡	大坊古墳	だいぼうこふん		福山市神辺町西中条字大坊2番	昭58.11.7	横穴式石室	墳丘／径約14m，高さ約5m， 石室／全長11.2m，玄室長5.32m，奥壁幅1.92m，奥壁高1.91m，羨道長4.4～4.82m，入口幅1.92m，入口高1.92m	神辺平野の北縁，中条の谷の入口付近の丘陵東斜面に立地する。標高50m，比高10m。 墳丘は，長円形をしており，背後には周溝が見られる。円墳と思われるが，方墳の可能性もある。 石室は，切石状の巨大な花崗岩により構築されている。玄室の奥壁は1枚，側壁は左右とも2枚ずつの大石を使用し，羨道の側壁も左右2枚ずつの大石を使用している。玄室のほぼ中央部の床面には，玄室を二分するかのように2個の横長な石が配されている。 本古墳の石室の特徴は，石材を左右対称に整然と用いることである。さらに，玄室と羨道の間の石柱幅を羨道長に含めると，玄室と羨道は同一規模となる点も注目される。 本古墳の構築時期は，石室の形態から終末期（7世紀）と推定される。備南地域の切石使用古墳の出現を考える上で重要である。		
県	史跡	八島塚谷横穴群	はっとりつかだによこあなぐん		庄原市西城町八島字大蔵	昭59.1.23	横穴墓群		広島県内で現在まで明らかな横穴墓は，旧比婆郡を中心に約60基があるが，本横穴群のように数基がまとまるものは，常定峰双（つねさだみねそう）横穴群（庄原市口和町），本郷横穴群（庄原市）があるが，前者は既に消滅し後者は埋没しており，現在構造の分かる横穴群としては唯一のものといえる。以上のように本横穴群は広島県における古墳時代後期（6～7世紀）における特色ある墳墓であるとともにその分布の状況からみると，山陰地方との関連を考えさせる墳墓としても貴重である。		
県	史跡	内堀の神代垣内落鉄穴跡（洗場）	うつぼりのかじろごうちおちかんなあと（あらいば）		庄原市東城町内堀字神代垣内	昭59.1.23			神代垣内落鉄穴跡は，東城盆地の北に延びる谷沿い，標高約600mの位置にあり，洗場跡の遺構をよく残している。この上流の山腹には40mの間をおいて，上の池と下の池の2ヵ所の鉄穴堤があり，この洗場まで幅約1mの鉄穴横手（水路）が長さ約600mにわたって続いている。この鉄穴横手沿いには鉄分の多い真砂土を採土した鉄穴洞も残っており，一応鉄穴全体の遺構が把握できる。 この鉄穴の稼業の時期は明らかでないが，安永9年（1780）の「奴可郡村々鉄穴帳」に「かじ路垣内落」として記載されており，少なくとも18世紀後半には稼業していたことが分かる。また最後は昭和19年（1944）頃まで鉄穴流しが行われたという。広島県の北部地域には，鉄穴跡が多数あり，東城町域でも鉄穴の遺構は随所に残るが，本例のように洗場跡がほぼ完全に保存されているものは，他に類例が少なく貴重といえる。		
県	史跡	旧寺古墳群	ふるでらこふんぐん		庄原市掛田町字旧寺	昭59.11.19	5世紀半ばから後半，前方後円墳1基，円墳11基	前方後円墳／全長61.7m	この古墳群の年代は，第1号古墳の形態的特徴からみて，5世紀後半頃と推定されるが，第2号古墳は一部第1号古墳造成の削平面にかかって造られているところからみると，第1号古墳より新しいものと考えられる。 備後北部の山間地帯のうち三次・庄原の両地域には，多数の古墳が分布するが，三次地域では帆立貝形古墳が多いのに対して，庄原地域では前方後円墳が集中する。本古墳群はその中で，備後北部最大規模の前方後円墳を中心とした古墳群として注目される。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	高杉城跡	たかすぎじょうあと		三次市高杉町	昭59.11.19 平成27.1.13　追加指定			馬洗川を東に見る高杉の平野部の中央に位置する本城跡は，周囲の水田から4～5mの比高を有する微高地に立地する。城内には知波夜比古（ちはやひこ）神社があり，この周囲約70×70mに堀と土塁が残っている。堀は幅4～5m,土塁は高さ1～2m,幅3～4mの規模で，過去に堀底から鐙の一部が発見されている。戦国期には江田氏の支城として続いたようであるが，天文22年（1553）の江田合戦と呼ばれる戦いで，本城も攻略されている。 県内で20例に満たない方形館の一つであり，史料から落城した年代が特定できる県内唯一の方形館である。 平成24年度に城跡西側で試掘調査をした結果，城に伴う横堀跡を確認した。この堀跡は，高杉城跡を特徴付ける重要な構成要素である。横堀跡と南側正面の郭を追加指定することにより，城跡の一体的な保存を図る。		
県	史跡	黒谷古墳	くろたにこふん		三原市大和町下草井	昭60.3.14	円墳（横穴式石室）	現在長6.85m，奥壁幅上部1.4～1.6m，高さ2.2m	この古墳は，椋梨川によって開けた椋梨の平地から奥深く入った黒谷の東側小支谷にあり，前面には黒谷及び椋梨の耕地を臨むことができる。 墳丘は，開墾により削平された部分が多いが，径10m以上，高さ3.5mの円墳と推定されている。石室は羨道（せんどう）を一部破損しているが，南西に開口した横穴式石室である。この横穴式石室は，石室奥壁に接し，石室に直交して石棚を設けたもので，石室の平面形は凵の字状をなすが，石棚の上部では工字状に近い。石室の現存長6.85m，奥壁幅1.4～1.6m，高さ約2.2mである。石棚は床面から1.3mの位置にある。 時期は，6世紀後半から7世紀前半と推定される。石棚を有する古墳は県内に例がなく，貴重である。平成11年（1999）には大和町により保存整備が行われた。		
県	史跡	帝釈名越岩陰遺跡	たいしゃくなごえいわかげいせき		庄原市東城町帝釈未渡字名越	昭60.12.2	縄文時代の岩陰遺跡		遺跡は，高さ約17m，幅約30mの石灰岩の岩壁下に南面しており，東西二つの岩陰部からなる。当初は，西岩陰部は間口幅約7m，奥行き4.5m，岩廂の高さ約1.5m，東岩壁部は間口幅約2.5m，奥行き2.5m，岩廂の高さ約2mの規模であった。昭和41・42年（1966・1967）に発掘調査が行われ，柱穴列や墓壙，炉跡など検出された。遺物は，縄文時代早期～晩期（約9,000～2,300年前）にわたる土器が層位的に出土しており，なかでも後期から晩期にかけて遺構が集中している。		
県	史跡	豊松堂面洞窟遺跡	とよまつどうめんどうくついせき		神石郡神石高原町上豊松字下谷向ケ市	昭60.12.2	洞窟遺跡，2小洞		洞窟は，二つの小支洞の入口部にあたる上洞部分と天田川の侵蝕によって形成された下洞部分からなる。岩盤の上に堆積する砂礫層の上部に厚さ約5.5メートルにわたってみられ，遺物は，縄文時代早期から晩期（約9,000～2,300年前）のものを中心とし，弥生時代（2,300～1,700年前），古墳時代（3世紀後半～7世紀）のものも出土している。本遺跡は帝釈峡遺跡群を構成する中規模遺跡の一つであるが，縄文時代後期後半には12体以上の人骨が検出されており，天田川流域から成羽川にかけての中核をなす遺跡として注目される。		
県	史跡	神田第二号古墳	じんでんだいにごうこふん		世羅郡世羅町堀越字神田	昭61.11.25	「軸受けをもつ石扉」をもつ横穴式石室	石室現存長3.4m，玄室長さ1.52m，奥壁部幅3m	神田第2号古墳は，広島県のほぼ中央の世羅台地に源流をもつ芦田川を眼下にみる天神山南麓の急傾斜地（標高370m，水田面からの比高10m）に位置する終末期（7世紀）の横穴式石室墳である。この古墳の東約10m，高さにして約2m高位置にある横穴式石室墳である第1号古墳とあわせ2基で神田古墳群を形成する。第2号古墳は，古くからの開墾により墳丘東半や石室東側の石材が抜き取られており，墳丘の詳細は明らかにできないが，残存する西，南側には主体部と並・直行する落ち込みがみられ，これを墳端とするなら一辺約9mの方形墳で，高さは石室床面から約3mであった可能性が強い。この古墳は「軸式片開き扉石」をつけた畿内型の切石を用いた終末期古墳ということが最大の特徴である。		
県	史跡	迫山第一号古墳	さこやまだいいちごうこふん		福山市神辺町湯野字迫山	昭61.11.25	迫山古墳群12基の中の1基 片袖式，横穴式石室	墳丘／径21.5m，高さ5m 石室／全長11.6m 玄室／長さ6.2m，高さ2.8m，幅2.5m 羨道／入口幅2m	迫山第1号古墳は，神辺平野を望む丘陵尾根先端の山腹傾斜面に位置し，12基（※）で構成される迫山古墳群中にあって最大の規模である。墳丘は版築状につき固めて盛土しており，径21.5m，高さ5mの円形をなす。墳丘の北面及び西側では浅い周溝がみられ，石室前面の両側には墳裾を示す列石も見られる。副葬遺物は，武器類，馬具類，装身具類，土器類の計274点がある。本古墳は，いわゆる大型横穴式石室墳と言われるものであり，玄室内空間容積44.8㎥，玄室床面積16.0㎡は，それぞれ県内第2，第3位の規模である。また，石室内から出土した多量の遺物は県内では3例目の単風環頭大刀や銀象眼銹付大刀など美術品として価値が高いものだけでなく，同一石室からの一括出土品として当時の生活，技術などを知る上で価値が高い。また，これらは備後南部における古墳時代後半期（6世紀）の政治的動向を解明する上で貴重である。 ※指定当時は11基とされていたが、その後の確認で現在は12基。		関連施設：福山市神辺歴史民俗資料館（084-963-2361）
県	史跡	五品嶽城跡	ごほんがだけじょうあと		庄原市東城町東城字五本ケ嶽山	昭62.3.30			この城跡は，備中・伯耆との国境に近い東城盆地を望む位置にある中世末期から近世初期（17世紀）にかけての山城である。五本竹城，世直(よなおし)城とも言われ，中世には宮氏，佐波氏が，次いで福島氏の城代である長尾氏が居城した。五品嶽城は，宮氏の築城による中世遺構の上に佐波氏・長尾氏による石垣，櫓，瓦葺建物などの近世初頭の技術が加えられている点にも特色がある。近世初頭以降は手が入っておらず完全に近く保存されており，学術的に貴重である。		
県	史跡	カナクロ谷製鉄遺跡	かなくろだにせいてついせき		世羅郡世羅町黒渕字東山	昭62.12.21			遺跡は，農園北隅の丘陵南斜面を12×9mの範囲に平坦にした場所にあり，斜面の下手は鉄滓（てっさい）・炉壁などの捨場となっている。遺構としては2基の製鉄炉（地下施設）が残っていた。第1号炉は，平坦面のほぼ中央に位置し，第2号炉は平坦面中央の北寄りに位置している。第1号炉・2号炉ともに，炉底下に防湿の施設がみられる。出土の鉄滓類は，二酸化チタンの含有から，3つのグループに分けられ，製鉄の原料としては砂鉄と鉄鉱石の混用されたことが推察される。鉄鉱石はマンガンを多く含む磁鉄鉱を中心とする。マンガン鋼に近い鉄が生産されたのであろうか。 この遺跡の年代は，出土の須恵器片から6世紀末から7世紀初めごろの時期と推定される。本遺跡は，県内でもこの時期のものは例が少なく，中国地方の砂鉄製錬の源流に位置づけられる重要な遺跡である。		
県	史跡	北塚古墳	きたづかこふん		福山市駅家町服部永谷	昭63.12.26	組合式家形石棺	現存の長さ2.34m，幅1.41m，高さ56cm	芦田川左岸の丘陵裾につくられた服部大池を北に約900mさかのぼると，三つの谷の集まったやや広い平地に至る。この古墳は，この平地を南西に臨む丘陵の端部に位置する。 石棺は，花崗岩製の組合式家形石棺である。蓋は各辺がゆるみをおびた長方形の平面をなし，南側の短辺部をわずかに欠損する。長さ2.34m，幅1.41m。本古墳は，家形石棺を直葬するものと考えられ，特にそれが花崗岩製というところに特色がある。花崗岩は硬いため高度な加工技術が必要とされ，広島県では切石造りの石棺式石室を別にすると，組合式のものとしては唯一であり，全国的にみてもそう多くはない。また時期的な面では，備後南部地域で注目されている猪の子古墳を始めとする石棺式石室墳の前段階に位置づけられる。古墳の外表施設は欠失しているが，広島県の特色ある古墳である。		

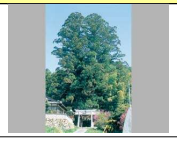
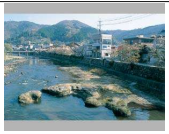
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	丸子山城跡	まるこやまじょうあと		呉市倉橋町城之岸	昭63.12.26			この城跡は，室町・戦国時代（14～16世紀）に倉橋多賀谷氏が拠った伝えられ，現倉橋町本浦の火山南斜面の尾根に位置する。安芸・芸予諸島辺が防長両国に拠る大内氏と備後・伊予東部辺までその勢威を伸長していた中央の幕府・細川氏との拮抗地帯となっていた関係上，倉橋島は，安芸国支配の拠点を東西条鏡山城に次ぐ大内氏にとっては，広島湾東岸から黒瀬を経由していくうえに重要な地点であったと考えられ，また大内氏麾下の警固衆としての倉橋多賀谷氏の動きを示す史料も見られる。 この城跡の一の郭は標高約50m（東西約20m，南北約30m）で，周囲は鋭く切落されている。二の郭はそれより南側約10m低く（東西17m，南北25m），三の郭はさらに南側約1m低く（東西15m，南北24m）で，ともにゆるやかな斜面になっている。このほか，外郭の一部と考えられるものや，階段状の石積などが認められる。		
県	史跡	南山古墳	みなみやまこふん		府中市上下町水永字南山	平1.3.20	前方後円墳（横穴式石室）	墳丘／全長約22.5m， 後円部／直径約14.5m，高さ約4m 前方部／幅約10m，高さ約1.5m 石室／全長約8.35m 玄室／長さ5.6m，幅2.5～1.53m，高さ2m 羨道／長さ2.75m，入口幅0.9m，高さ1.3m	この古墳は，県道福山上下線の上下町から府中市に至る境界辺りに位置し，平地を東に望む比高約20mの丘陵端に築かれた前方後円墳である。全長は22.5mで，後円部は直径約14.5m，高さ約4mで，後円部の東南に長さ約8m，幅約10m，高さ約1.5mの前方部がとりついている。前方部は長さ・高さのいずれも後円部の二分の一前後の規模であり，前方部両端の張出しもつ。内部主体は，後円部の中央あたりから主軸に対して直交し，東北の墳裾に入口部をもうけた横穴式石室である。本古墳の年代は，出土遺物がないので細かな検討ができない。内部主体が羽子板状をなす平面形の横穴式石室であることから，6世紀後半頃と推定しておきたい。		
県	史跡	大迫山古墳群	おおさこやまこふんぐん		庄原市東城町川東字大迫山	平1.11.20	前期古墳， 第1号古墳／前方後円墳（竪穴式石室） 第2号古墳／円墳	墳丘／全長約46m 後円部／直径27m，高さ5m 前方部／幅19.5m，高さ2m 石室／全長5.14m，幅1.07～1.18m，深さ1.1m 第2号古墳／直径17m，高さ2.5m	大迫山古墳群は，2基の古墳からなり，第1号古墳は前方後円墳で，第2号は円墳（未調査）である。 第1号古墳は墳丘の全長約46m，後円部直径27m，高さ5m，前方部の幅19.5m，高さ2mである。埋葬施設は，竪穴式石室で，全長5.14m，幅1.07m～1.18m，深さ1.1mである。第2号古墳は直径約17m，高さ2.5mである。 第1号古墳は，前方部が撥形に開く。墳丘外表には葺石（ふきいし）をもち，墳丘裾には列石を巡らす。出土品には鏡（獣首鏡），勾玉，管玉，ガラス製小玉，鉄槍，鉄鏃（てつぞく），銅鏃（どうぞく），鉄剣，鉄刀，筒形銅器，矢筒，鉄手斧などがあり，鏡や矢筒は出土例が少ない。この古墳は，広島県の前期古墳を代表する一つである。		
県	史跡	今田氏城館跡	いまだしじょうかんあと		山県郡北広島町今田	平1.11.20			この城館跡は，室町・戦国時代（15～16世紀）に今田氏が拠った現千代田町今田の谷の最奥部に位置する城館遺構である。城郭は，今田の谷の最奥部，南側に今田川を臨む標高461m（比高110m）の最高所から南東側に延びる尾根を加工している。1～4の郭のほか，若干の土塁跡と井戸，虎口と竪堀が見られる。この城跡からは盆地全体を眺望でき，壬生城・有田城とは指呼の距離にある。さらに北には，寺原城，日山城らも遠望できる。このことは，今田城が，この谷を本領域とする今田氏の支配拠点としてのみならず，この地域の在地領主と結束し，在地の支配秩序を維持していくうえにきわめて適した場所を選んで構えられていたことを示している。 館跡の石垣の築法は，吉川元春居館跡のそれに類似している。館跡の左奥には築山・池・水路をもつ庭園跡が残っている。現在，城館跡全体は松雑木林・水田として良好に保存されている。		
県	史跡	戸島大塚古墳	としまおおつかこふん		安芸高田市向原町戸島字立岩	平2.12.25	方墳（横穴式石室）	一辺約18m，高さ4.5m 石室／全長10.7m 玄室／長さ6.1m，奥壁部幅1.85m，中央部幅1.8m，高さ2.3m，玄門部高さ2.2m 玄門／幅1.6m，高さ約1.6m 羨道／長さ4.6m	この古墳は，江の川支流戸島川の東岸の山麓緩傾斜面に立地し，8基から成る滝川古墳群中最大の古墳である。 墳形は平面形が一辺約18mの方形で，高さ4.5m。墳丘の中位から上方にかけては石室の天井石の部分に相当するためか，傾斜が強くなり，細長いドーム状の墳頂部となっている。内部構造は方形の南辺の中央，南西に開口する横穴式石室で，全長10.7m，平面形が横長の2の字形で，玄門によって羨道（せんどう）と玄室に分けている。 この古墳の年代は，長大な切石状の石材を用いた横穴式石室，玄室幅が一定する横長矩形の平面形などの特徴からすると7世紀初頭前後に築造されたものと推定される。		
県	史跡	小鳥原砂鉄製錬場跡（大谷山たたら）	ひとばらさてつせいれんじょうあと		（製錬場跡） 庄原市西城町小鳥原字細谷 （大鍛冶場跡） 庄原市西城町小鳥原字上坂根	平3.4.22			この遺跡は，西城町北東部の鳥取県境に近い西城川最上流域の山間部にあり，小鳥原川に注ぐ谷川の出口に開けた南向きの場所で，今は畑や荒地になっている。本遺跡は本製錬場跡として高殿，元小屋，銑（ずく）破砕工場，砂鉄再洗場，落池（おとしいけ）の5つの遺構と，製錬場から北西約500mにある大鍛冶場跡からなる。 本製錬場は，明治34年（1901）に中島久三郎の経営となり，大正11年（1922）頃まで操業された。高殿は，大正7年（1918）に屋根の葺替を行うとともに，天秤鞴（てんびんふいご）は水車鞴に代えられた。 本製錬場跡は，近世以降中国地方で発達したわが国独自な製鉄技法である"たたら吹製鉄"を代表する一つと言える。建物の現存しないのは残念であるが，写真，見取図，スケッチなどや道具類の残る貴重な例である。また，天秤鞴から水車鞴に転換しながらたたら吹製鉄の終焉を示す状況は，他に類をみない。		
県	史跡	歳ノ神墳墓群	さいのかみふんぼぐん		山県郡北広島町新郷	平3.4.22	弥生時代後期， 第2号墓／箱式石棺墓5，土壙墓2 第3号墓／四隅突出型墳墓（主体内部は箱式石棺墓2），土壙墓（木棺墓） 第4号墓／長方形四隅突出型墳墓（主体内部は箱式石棺墓6）	第3号墓／東西10.3m，南北3.5m（復元6m），高さ0.7m，方形突起部1.2m（北西・北東隅，石列）， 第4号墓／南北10.2m，東西7.5m（復元），高さ0.9m，方形突起部1m（北東・南東隅），	江の川上流を望む標高286m～305mの低丘陵尾根の緩傾斜面に位置し，東尾根の弥生時代後期（1～3世紀）の墳墓5，西尾根の弥生時代後期の墳墓1，住居跡7からなっている。昭和59年（1984），県営千代田地区工業団地造成工事に係わる事前調査で発掘調査が行われ，このうち東尾根の2・3・4号墓は調査後埋め戻して保存された。 歳ノ神墳墓群は弥生時代後期の墳墓群で，低い長方形の墳丘をもち，その四辺を列石と貼石で区画した墳丘墓（四隅突出型墳墓，3・4号墓），溝で墓域を区画した墳墓（2号墓），墓域区画施設の無い墳墓（4号墓南部，西部）の3種が認められ，当時の集団構成員のなかに，埋葬される施設，場所の異なる階層分化が進行していたことを窺わせる資料である。また，本遺跡の四隅突出型墳墓は，安芸地方唯一の例であり，現在のところ分布の西限にあたっている。		
県	史跡	中出勝負峠墳墓群	なかいでしょうぶだおふんぼぐん		山県郡北広島町新郷	平3.4.22	弥生時代， 第1号古墳／円墳（竪穴式石室） 第2号墓／隅丸長方形の台状墓，箱式石棺1，土壙墓1 第3号墓／長方形台状墓，箱式石棺3，土壙墓6	第1号古墳／径9.3m×8.3m，高さ2m，石室長さ約1.8m×幅約1m 第2号墓／南北8.6m，東西4.15m，高さ0.5m 第3号墓／東西17.7m，南北12m，高さ1.8m（東側）～3.6m（北側）	中国自動車道「千代田I.C」の南，江の川支流志路原川と冠川の合流点を見下ろす，標高305～320m，南西に延びる低丘陵尾根上にあり，弥生時代（約2,300～1,700年前）台状墓2，古墳7からなっている。このうち，最も低いところにある第1号古墳，第2・3号墓が保存された。 本墳墓群のうち第1号古墳の小型竪穴式石室は末期の退化形式でかつ複数埋葬という本来箱式石棺墓に時折りみられた埋葬手法を取り入れた点は，より箱式石棺に近い。時期も鉄鏃（てつぞく）の形態からみても5世紀後半～6世紀初に位置するものであり，横穴式石室の導入や須恵器の副葬が始まる直前の状況を示す良好な資料である。第2・3号墓は出土土器から見て弥生時代後期前半（1世紀頃）の時期で，地山を長方形に削り出して盛土をなし，西北の平野部から見えるところ等3.6mと高くして高塚としての意識を示している。このような台状墓は特定集団墓と考えられ，首長あるいは有力構成員層の墓と推測される。		
県	史跡	薊山城跡	しとみやまじょうあと		庄原市高野町新市	平4.10.29			この城跡は，高野町新市の盆地の東端に位置し，西流する神野瀬川に南流してきた毛無川が交わる上市の北東側に位置する標高775m，比高220mの尾根筋にある。 遺構は東西に延びる山頂郭群を基本とし，南郭群，北東郭群などからなる。室町時代中期（15世紀）以前に遡ぼって城主を推定する史料をもたないが，戦国時代（16世紀）には，鉄の生産，流通が盛んであった備後北部から出雲南部にかけての山間地域に大領域を領有していた多賀山氏の本城であった。山陰側の尼子氏と山陽側の大内氏，続く毛利氏の両勢力が拮抗する境目領主の拠城として注目される。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	石鎚山古墳群	いしづちやまこふんぐん		福山市加茂町上加茂字加茂が岡	平4.10.29	円墳 第1号古墳／竪穴式石室2基 第2号古墳／組合式木棺1基，割竹形木棺1基	第1号古墳／直径20m，現存の高さ3m 第2号古墳／直径16m，現存の高さ2m	石鎚山古墳群は，芦田川中流域の加茂川によって形成された扇状地をのぞむ北向きの低丘陵端部に位置し，2基の古墳からなる。 第1号古墳は，直径20m・現存の高さ3mの円墳で2基の竪穴式石室を内部主体とする。第2号古墳は，第1号古墳の南東約20mにあり，直径約16m・現存の高さ2mの円墳で2基の土壙墓を内部主体とする。第1号古墳に見られる列石状葺石（ふきいし）や竪穴式石室の構造などは，古墳時代前期（4世紀）の特徴をよく示しており，この古墳の年代は4世紀半葉から後半の時期と推定される。第2号古墳は，土師器片などから，ほぼ同時期と考えられている。 この古墳群は，芦田川中流域の神辺平野に分布する古墳の中では，初期の古墳群の一つであり，円墳であるが，その構造的特色，副葬品の組合せも古式の様相をよく示しており，備後南部の前期古墳を代表するものである。		
県	史跡	唐樞古墳	からびつこふん		庄原市川西町宇唐樞	平5.2.25	前方後円墳（横穴式石室）	全長約45m， 後円部／直径29～31m，高さ約6m（南側）， 前方部／長さ約16m，先端部幅約17m，くびれ部幅約14.5m，高さ約2m	この古墳は庄原市を東から西に貫流する西城川が，旧高村の低平な河谷平地から峡谷にかかる地点にあり，西城川右岸にむけて張り出す低丘陵上に造られている。本古墳は，丘陵先端にちかい緩傾斜面に平行して築成された前方後円墳で，古墳時代後期（6世紀後半）のものである。主軸を東北東ー西南西におき，丘陵先端側に前方部をつくる。全長48.6m，後円部の直径28.8m，高さは南側で約6mである。主体は後円部につくられた横穴式石室で，北ー南に主軸をとり，南に開口する。 広島県における前方後円墳のなかで，横穴式石室を内部主体するものは，きわめて少ない。庄原市域に限っても約30基の前方後円墳のうち，本古墳と投石古墳（全長約17m）の2基にすぎない。本古墳の横穴式石室も全長10mをこえる大形の部類に入り，貴重である。		
県	史跡	壬生西谷遺跡	みぶにしたにいせき		山県郡北広島町壬生字西谷	平6.2.28	弥生時代後期後半，集団墓地 A群／箱式石棺墓2，木棺墓1，木蓋土壙墓6，土壙墓1 B群／箱式石棺墓2，木棺墓6，木蓋土壙墓2，土壙墓1 C群／木蓋土壙墓3，土器蓋土壙墓1，土壙墓7 D群／木棺墓1， E群／箱式石棺墓1		本遺跡は，弥生時代後期後半（3世紀頃）の34基以上からなる集団墓地で，昭和63年（1988）に千代田町運動公園建設に伴い発掘調査されたものである。墳墓群は5群に分かれ，箱式石棺墓をはじめ多様な埋葬施設で構成されており，中国の後漢鏡などが出土している。この時期の墓制や首長墓，副葬品が明らかになる貴重な遺跡である。		
県	史跡	糸井大塚古墳（糸井塚の本第1号古墳）	いといおおつかこふん		三次市糸井町	平6.10.31	帆立貝形古墳	全長約65m，後円部直径56m，高さ8～10m，造出部幅19～20m，高さ3mで	この古墳は，全長約65m，後円部直径56m，高さ8～10m，造出部幅19～20m，高さ3mで，墳丘の周囲に幅約30mの周溝（周庭帯）がめぐり，径100mを超える墓域を有する県内最大の帆立貝形古墳である。墳丘には円礫による葺石が葺かれ，円筒埴輪や家形埴輪片が見つかっている。広島県は，帆立貝形古墳の数が全国で最も多い県であり，そのほとんどが三次地域に集中しており，このことは三次地域の古墳の特徴の一つである。三次地域の古墳時代社会，帆立貝形古墳の性格の解明，及び5世紀前半のこの地域における畿内政権の地方経営を考えるうえで重要な古墳である。		
県	史跡	相方城跡	さがたじょうあと		福山市新市町相方	平7.1.23	山城跡，石垣		この城跡は，標高191mの山頂を中心に，石垣を延長120m以上にわたって築いた近世初頭（17世紀前半）の山城である。角の部分には切石を用い，打込接（うちこみはぎ）で築き，西側の虎口には桝形状に屈曲する階段状の箇所もある。安土桃山時代（1572～1600年）における毛利氏が山陽道筋情報を集約し，対応するために，天正15～19年（1587～1591年）の惣国検地後，慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの直前まで10年近くかけて整備したとみられる重要な城跡である。		
県	史跡	豊平町中世製鉄遺跡群 横ケ原製鉄遺跡 矢栗製鉄遺跡 坤東製鉄遺跡	とよひらちょうちゅうせいせいついせきぐん（まきがはらせいてついせき，やぐりせいてついせき，こんぞくせいてついせき）		山県郡北広島町	平9.9.25			山県郡豊平町では，鉄滓（てっさい）等の散布状況などから，約200か所の製鉄遺跡が確認されており，その多くは豊平町の南半部の太田川水系である。このうち大矢製鉄遺跡，矢栗製鉄遺跡，若林製鉄遺跡，坤東（こんぞく）製鉄遺跡，横ヶ原製鉄遺跡について発掘調査が行われ，いずれも中世の製鉄遺跡であることが判明している。 このうち，横ヶ原製鉄遺跡，坤東製鉄遺跡と矢栗製鉄遺跡の3遺跡が県史跡に指定されている。3遺跡は，製鉄炉の地下構造がそれぞれ異なり，炉の大型化に対応して地下施設が次第に深く大型化して近世たたらへ変遷するケースとその一方で近世たたらへつながらない技術があったことがうかがえ，製鉄史，産業史を解明する上で重要な遺跡である。		
県	史跡	松尾城跡	まつおじょうあと		安芸高田市美土里町	平19.4.19	山城跡，空堀群		松尾城は，南北朝時代から戦国時代にかけて，安芸・石見両国にまたがって広大な領域を支配した国人領主・高橋氏の安芸国側の居城である。南北朝時代末期から室町時代初期に築城されたと推定され，享禄2年（1529）大内氏や毛利氏の連合軍によって落城した。 城跡は，横田盆地北側にそびえる大狩山から南へ延びた尾根上にある。比高約150mの最高所から東の尾根筋に郭（くるわ）を並べ，東・北・南の尾根続きに堀切（ほりきり），南北両側斜面に竪堀（たてぼり）を配置し，高い切岸（きりぎし），明瞭な通路を有する加工度の極めて高いものである。 広島県地域の中世政治史を語る上で欠かせない城跡で，全国的にみても現地に残る遺構の年代が判明する貴重な事例である。		
県	史跡	辰の口古墳	たつのくちこふん		神石郡神石高原町	平21.4.23	前方後円墳（竪穴式石室・円筒埴輪棺）		辰の口古墳は，谷平野に面する低丘陵端の山林中にある。墳長77m，比高約30mで，主軸をほぼ南北にとっている。後円部は，南北41m，東西36mの楕円形をしており，高さが7.3mで，2～3段に築成されている。前方部は，長さ36m，前端部24m，高さ4.9m，くびれ部幅16mで，2段築成である。埋葬施設は，後円部頂部に竪穴式石室，西側くびれ部に円筒埴輪棺が見つかっている。 広島県北部の山間地に築造された備後地方最大の前期型前方後円墳であり，県北地方の古代を解明する上で極めて貴重である。		写真提供:広島大学大学院文学研究科考古学研究室
県	名勝	石ケ谷峡	いしがたにきょう		広島市佐伯区湯来町菅沢	昭12.5.28			石ヶ谷峡は，瀬戸内海に流れる太田川の支流の水内(みのち)川の一支谷で，花こう岩の河床に清流が流れ，竜頭の滝など多くの滝がある。峡谷内は，兜(かぶと)岩・名号岩などの奇岩に富む。わけても屏風(びょうぶ)岩は直立40～50mから120mにおよび，またこうもり岩は約300mそばだち，峡の二大景観をなしている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	名勝	弥栄峡	やさかきょう		大竹市栗谷町大栗林，大竹市小方町小方	昭24.8.12			安芸国と周防国の国境を流れる小瀬川(おぜがわ)の中流，魚切(うおきり)から南約3kmの峡谷。この地一帯は花こう岩からなり，特に粗大な方状節理，板状節理が発達し，渓流の浸食により両岸はそばだって，屏風岩(びょうぶいわ)・重ね岩などの奇勝を生んでいる。峡谷の様相はアカマツ・カシなどの常緑広葉樹も入り交じり，秋の紅葉も美しい。鳥越の岩壁の下流と発電所の上流約1kmの川底には甌穴群がみられる。		
県	名勝	吉水園	よしみずえん		山県郡安芸太田町加計	昭26.7.10	吉水亭／数寄屋風，茅葺，天明2年(1782)建築		芸北の鉄山経営者佐々木八右衛門が，天明元年（1781）に造った庭園で，縮景園を改修した京都の庭師・清水七郎右衛門に天明8年（1788）大改修させた。 本園は加計の町なみの北側の丘陵に設けられ，山ぎわにあずまやを設け，前に池が掘られている。園内の吉水亭は，天明2年（1782），加計の森脇弥右衛門が建てたもので，数寄屋風(すきやふう)，萱葺(かやぶき)の平屋，内部は二畳と四畳に分かれる。二畳の室から庭の眺望は最もよく，また太田川のながめもすばらしい。遠景と地形の利用，あずまやと庭との地割も巧みで，まれにみる名園である。 園内に金屋子（かなやご）神社が勧請(かんじょう)されていることも鉄山経営者の庭らしい。 5月の頃，池のほとりのサツキの枝や草むらの中には，モリアオガエル（県天然記念物）の産卵が見られる。		
県	名勝	龍頭峡	りゅうずきょう		福山市加茂町山野久賀山国有林80，林班い小班～に小班	昭29.1.26		高さ57m	日本有数の準平原である吉備高原の縁辺部を刻む浸食谷は多いが，みごとな峡谷は少ない。その中で龍頭の滝およびその下流に続く峡谷は実にみごとなものである。この一帯地は千枚岩質粘板岩と石英粗面岩からなり，滝の高度は57mに達し，その直下には大きな滝つぼがあり，さらに峡谷内にも大小の滝や急流が連続している。 龍頭峡の景観に一層の光彩をそえるのは天然林で，常緑広葉樹の優生な林相は，原始林的様相を呈している。動物相も豊かで，しばしば野猿も出没する。夏は龍頭の滝をよじるウナギが望見され，瀬にはカジカの声を聞くことができ，冬はしばしばオシドリも飛来する。		
県	名勝	常清滝	じょうせいたき		三次市作木町作木字天楽371ノ1，372ノ4番地	昭35.8.25		高さ126m 荒波36m，白糸69m，玉水21m	常清滝は江の川水系の作木川の支流にかかる滝である。この渓谷は海抜500m前後の吉備高原面を浸食して形成されたものである。常清滝は灰白色流紋岩の断崖にかかる上下三段からなる滝で，上を荒波（約36m），中を白色（約69m），下を玉水（約21m）といい，あわせて約126mの高さをもっており，栃木県の華厳滝や和歌山県の那智滝よりも高い。上流域が台地で面積狭少のため水量において乏しく，滝つぼ，および周囲の規模がこれらに比べてやや貧弱であるが，中国地域では，このような高い滝は他に例がなく貴重である。 渓谷の植相は，コナラ・アベマキ・エノキを主とした落葉広葉樹で，景観的な四季の変化を楽しめる。		
県	名勝	千葉家庭園	ちばけていえん		安芸郡海田町中店	平3.4.22			千葉家住宅は旧山陽道海田宿にあり，旧山陽道に面した北部に主屋と書院の建物が建っている。 千葉家庭園は，江戸時代初期（17世紀）に海田に居を構えた千葉家書院に付属した庭園として江戸時代（1603～1867）の早い時期に営まれた。その後，安永3年（1774）の書院建て替えにともなって改造されたが，築山や滝口などの古い部分は残されている。安永改造の部分は汀石（ていせき）に卓石を使うなど，時代的な特徴が見られるが，手水鉢（ちょうずばち）を兼ねた大きな立石を配するなど，意匠的に見て優れた内容を有している。		
県	名勝天然記念物	二級峡	にきゅうきょう		呉市広町，郷原町	昭24.10.28			二級峡は，黒瀬川によって浸食された花こう岩の基盤からなる峡谷である。長さが1kmの短い区間であるにもかかわらず，峡中には二級滝（幅3m，上段の高さ21m，下段の高さ22m）をはじめ，霧滝・うず滝などの滝が多く，うっそうとした植物相がこれに調和して峡谷美をなしている。峡谷の源頭右岸には，最初の流路が跡をとどめ，さらに現流路に変わるまでに，はたご淵から白滝へ向う流路があり，河川の浸食の進行に伴う落ち口の変遷の跡が明らかである。その河底には基盤岩の節理に沿って，無数の甌穴群があり，小は径20～30cmのものから，大は10m余（はたご淵うず淵）のものまであり，甌穴の成長する過程をよく示している。		
県	天然記念物	豊浜のホルトノキ群叢	とよはまのほるとのきぐんそう		呉市豊浜町豊島字礼場口	昭12.5.28			熱帯系常緑樹ホルトノキを主とした群叢で，最大のものは目通り幹囲2.23mに達する。このほかにもシイ・クスノキ・クロガネモチ・ネズミモチ・タイシンタイバナなど瀬戸内海の島嶼部特有の樹種に富み，この地方本来の林相を保っている。		
県	天然記念物	忠海のウバメガシ樹叢	ただのうみのうばめがしじゅそう		竹原市忠海町字宮床	昭12.5.28			本樹叢は，社殿の北西部から背後にかけて生育している6株のウバメガシからなり，順に目通り幹囲1.84m，1.74m，1.44m，1.37m，1.30m及び1.10mである。本樹叢はその生育状態から一見，植栽されたもののようにみえるが，自然生の名残であると考えられる。北方の丘の斜面に発達しているクロマツ林は群落調査の結果，クロマツ―ウバメガシ群落の組成を示しており，また，西側の山裾ではクロマツとウバメガシとが崖地に生育している。これからも，クロマツ―ウバメガシ群落はこの地の代表的林相で，本樹叢が天然のものであることを証明している。		
県	天然記念物	上高野山の乳下りイチョウ	かみたかのやまのちちさがりいちょう		庄原市高野町新市字上市	昭12.5.28			本樹は県内第1位のイチョウの巨樹で，多数の乳柱（乳房状突起）が垂れ下がる雌樹である。乳柱は局部的な栄養過剰によって生ずるといわれ，実がならない老木に多く見られるが，本樹のような実のなる雌株にできることもある。 天平元年（729），建御雷神（たけみかづちのかみ）をこの地に勧請したとき，神木として植えられたと伝えられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	ベニマンサク群叢	べにまんさくぐんそう		廿日市市大野字獅ガ岡，字横撫 廿日市市友田字広原山	昭12.5.28 昭45.10.30 （一部解除）			ベニマンサクはマンサク科ベニマンサク属を代表する一属一種の落葉低木で，その葉は中秋の頃一時に深紅色となる。長野・岐阜両県及び高知県などの自生地が知られているが，佐伯町・大野町にわたる松が峠を中心とする地域は，他地方の自生地に比べてはるかに面積も広く生育状況もよい。不連続分布の植物例として植物地理学上，貴重な存在である。		
県	天然記念物	古保利の大ヒノキ	こほりのおおひのき		山県郡北広島町大棒	昭17.6.9			本樹は古保利薬師収蔵庫前に位置する。樹高は約30mで地上約6mのところで六支幹に分れ県内有数の巨樹であったが，平成3年（1991）の台風・落雷等で折れてしまい，現在は四支幹になっている。		関連施設：古保利薬師収蔵庫（0826-72-5040）
県	天然記念物	本地のクロガネモチ	ほんじのくろがねもち		山県郡北広島町下別所	昭17.6.9			クロガネモチは雌雄異株の常緑広葉樹であるが，本樹は雄株で，樹高約31mである。地上約3mのところで南北の二大支幹に分れ，全形はほとんど平行に直に立ち，円筒形の樹冠を形成する。文禄・慶長の出兵(1592～1598)に出陣した者が苗木を持ち帰ったという伝説がある。		
県	天然記念物	栗谷の蛇喰磐	くりたにのじゃくいいわ		大竹市栗谷町栗谷	昭23.9.17			小瀬(おぜ)川の支流玖島(くじま)川と本流との合流点は，本支流の河床の高さが異なるため早瀬をなし，渦流(かりゅう)が河床の花こう岩を浸食して大小多数の甌穴（おうけつ）を生じている。甌穴は河床でそれぞれ孤立し，あるいは連鎖状をなし，さらに浸食が進んで深い清状になったものなど多種多様で，甌穴の成因と成長発達の過程を示す貴重な資料である。地元ではこの一帯を蛇喰磐と称し，甌穴には水神のもちつき釜，雨の釜，風の釜などの名がつけられている。		
県	天然記念物	大朝町の大アベマキ（矢熊のミヅマキ）	おおあさちょうのおおあべまき（やぐまのみづまき）		山県郡北広島町大塚字矢熊	昭23.9.17			アベマキは，我が国中部以西の山地に多い落葉高木で朝鮮半島・中国にも分布するが，乱伐の結果大木は極めて少ない。本樹は樹高約30mを測り，地上高5mで南に大枝，北に小枝を分かち，それより上方約3m間に東西南に4本の大小枝を分かっている。県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	筒賀のイチョウ	つつがのいちょう		山県郡安芸太田町上筒賀字梶原	昭24.8.12			イチョウは中国原産で，我が国に渡来した落葉性の大高木(樹高約48m)である。本樹の主幹はほぼ直立し，地上約3m付近で初めて小枝を分かつ。樹勢は旺盛で，筒賀神社の本殿前をおおうばかりの見事な樹冠を形成している。往古より神木として手厚く保護され，イチョウとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	津田の大カヤ	つだのおおかや		廿日市市津田横矢	昭24.10.28			本樹は真幡（まはた）神社拝殿の西側に位置し，往古から神木として保護されてきた。主幹はほとんど直立（樹高約35m）し，枝の発達もよく，樹勢は極めて旺盛で拝殿をおおうばかりである。カヤとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	矢川のクリッペ	やがわのくりっぺ		福山市加茂町矢川字カタヤ字オソイシ	昭24.10.28			荒神山（比高170m）の石灰岩の丘は，それ自体の層の傾斜と，基盤の粘板岩の層（荒神山の中腹以下）の傾斜が著しく異なること，及び石灰岩直下の粘板岩が砕かれて，角礫岩となっていることなどにより他から移動してきたものとされている。 クリッペとは，横移地塊の意味で，北方から加わった圧力のため，押しかぶせによって，断層面に沿ってずり動いた石灰岩の地盤がその後の浸食作用によって孤立するようになったものである。このような強力な地塊の運動は，中生代ジュラ紀（約2億800万～1億4600万年前）後に西南日本に起った大造山運動によるものとされている。		
県	天然記念物	上原谷石灰岩巨大礫	かみはらたにせっかいがんきょだいれき		福山市加茂町山野字上原谷	昭24.10.28			この巨大礫は，高さ30m，幅33m，奥行35m以上の巨大な岩塊である。礫の下には大きな洞穴があり，天井から鍾乳石が垂れ，石筍(せきじゅん)も成長している。洞穴の側面や上部は，赤色の凝灰岩質礫岩(ぎょうかいがんしつれきがん)で，この巨大礫は石灰岩の地塊の一部が崩壊し転落したものであろうと推定され，地殻運動の偉大さに感嘆させられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	御寺のイブキビャクシン	みてらのいぶきびゃくしん		尾道市瀬戸田町御寺字西郷	昭24.10.28			イブキビャクシンは針葉高木で，日本では主として青森県以南の太平洋岸地域に自生するが，多くは庭園木として栽培されている。本樹は県内有数のイブキビャクシンの巨樹である。樹高は7.6mで，主幹は地ぎわで東西の二大支幹にわかれ曲折しており，植物形態学上からみても価値の高いものである。なお，イブキビャクシンは，ビャクシンの別名である。		
県	天然記念物	鹿川のソテツ	かのかわのそてつ		江田島市能美町鹿川	昭25.3.22			ソテツは亜熱帯地域に自生しているが，昔から人家や寺の境内などに植えられ，その中には巨大な株に生長しているものが少なくない。しかし，根回り周囲5mを超すものは比較的少ない。本樹は根元から大小の六支幹に分かれ，周囲の三支幹は他のほとんど倍長に達する。また各支幹には無数の珠芽（しゅが）が発生して，奇観を呈する。ソテツでは県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	竹仁のシャクナゲ群落	たけにのしゃくなげぐんらく		東広島市福富町上竹仁字高見山，字黒ボヤ山	昭26.4.6			ホンシャクナゲは本州中部地方以西，四国及び九州に分布し，淡紅紫色の花をつける。普通，渓谷崖上などに生育しているが，本群落のように広大な地域を占め，雑木林の中に天然のままに生育して，密度もかなり高い例は稀れである。よく生育したものは樹高3m余にも達する。		
県	天然記念物	赤屋八幡神社の社叢	あかやはちまんじんじゃのしゃそう		世羅郡世羅町赤屋字根廣田	昭26.4.6			社叢内の樹はスギが支配的であるが，巨樹は比較的少ない。しかし，シラカシ・カシワ・ソヨゴ・クリ・シデ類などの混生が多く，この地方本来の林相を示している。カシワの中には胸高幹囲3.05mに達するもの，またシデは3.05mに達するものがあり，いずれもカシワ及びシデとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	男鹿山スズラン南限地	おじかやますずらんなんげんち		世羅郡世羅町青近字男鹿山	昭26.4.6			スズランは我が国の中部以北の山野では珍しくないが，近畿以南の地ではごく稀である。本群落は，玄武岩からなる男鹿山（標高634m）の山頂に近い北側斜面（620～630m）にあり，その範囲は狭い。すでに国指定となっている奈良県北部で発見された自生地とほぼ同緯度に位置し，中国地方にあるものとして，その学術上の価値は高く，スズランの分布の南限地として注目されている。		
県	天然記念物	ゴギ	ごぎ		庄原市西城町熊野	昭26.11.6			中国山地の渓流に生息するゴギは，日本固有の高山魚イワナの一種で，中国地方の特有種である。イワナ属のものは北方水域に分布の中心をもつ魚族である。イワナは本州では高山の渓流に生息するが，ゴギはこの属のうちで比較的，低高度のしかも最も南方に分布する種で，地質時代寒冷期の残存種として陸封されたものとされている。体長30cmに達し，中国山地の源流冷水域に限って生育し，大きい黄色斑を体側頭上にもつ魚類である。		
県	天然記念物	熊野神社の老杉	くまのじんじゃのろうすぎ		庄原市西城町熊野	昭27.2.22			比婆山山麓にある熊野神社は古くから多くの人々の信仰を集めており，その社叢は，亭々たる老杉によって形成されている。目通り幹囲5.0m以上のものが11本を数えており，そのうち最大のものは8.1m，続いて7.3mと，いずれもスギとしては県内有数の巨樹が見られる。		
県	天然記念物	吉水園のモリアオガエル	よしみずえんのもりあおがえる		山県郡安芸太田町加計字神田	昭27.10.28			モリアオガエルは樹の枝上に泡沫状の卵のうをつけ，その中に産卵する。かえったオタマジャクシは，その分泌物中で発育し，後これを脱して水中に落ち，変態を完了する。このような産卵の習性は他のカエルに見られない珍しいものである。吉水園内には約330㎡の浅い庭池があり，本種の繁殖に適当な環境が維持されている。毎年5月下旬頃から池のほとりのサツキ・カエデなどの枝の上や草むらの中に卵のうが容易に観察される。		
県	天然記念物	正伝寺のクロガネモチ	しょうでんじのくろがねもち		広島市安佐南区安古市町相田	昭28.4.3			クロガネモチは本州中南部から台湾・中国の暖地に分布する雌雄異株である。本樹は，地上約5mより枝を出し始め，短円柱状の樹冠部を形成している。クロガネモチでは県内有数の巨樹である。		

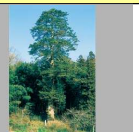
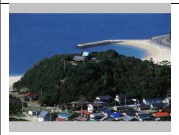
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	蘇羅座神社のスギ	そらひこじんじゃのすぎ		庄原市本村町本	昭28.4.3			本神社は本村の集落の奥まった山ぎわにあり，その境内に主としてスギからなる見事な社叢が見られる。境内には目通り幹囲2.0m余に達する巨杉が8本見られるが，参道の左右にある2株は特に巨木である。向って右側のスギが最大で胸高幹囲5.5m，左側のスギは5.2mに達する。根回り周囲はほとんど優劣なく，共に7.6mである。他のスギもこの2株よりもわずかに小木というだけで，この付近では稀に見るスギの巨樹叢である。		
県	天然記念物	福泉寺のカヤ	ふくせんじのかや		福山市加茂町山野	昭28.10.20			カヤは日本特産の常緑針葉高木で，関東地方から屋久島まで分布し，暖帯の常緑広葉樹林帯と温帯の落葉広葉樹林帯との間に介在する中間帯森林の重要構成要素となっている。本樹の主幹はほとんどまっすぐで，地上約9m付近で初めて小枝を分かち，樹形は独立木の典形的なものである。樹勢は旺盛で，福泉寺の山門をおおうばかりの見事な樹である。カヤとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	東酒屋の褶曲	ひがしさけやのしゅうきょく		三次市東酒屋町字大久保	昭29.4.23			東酒屋松尾集落の北東方に通じる道路に沿って露出する。ほぼ水平に重なる第三紀中新世（2300～500万年前）備北層群（海成層）上部層の頁岩（けつがん）・細粒砂岩の薄互層が，正褶曲(しゅうきょく)・傾斜褶曲・転倒褶曲・等斜褶曲・横臥(おうが)褶曲などいろいろな形式の複雑な褶曲構造を示し，さらに断層をともない約200mの短距離の間によく認められる。		
県	天然記念物	冠高原のレンゲツツジ大群落	かんむりこうげんのれんげつつじだいぐんらく		廿日市市吉和	昭29.4.23			冠高原は，海抜約800mに位置し，全般的に低木，草本が優位を占める広い原野状を呈する。高原の植生は森林としてはカシ・ススキ群落，低木林ではレンゲツツジ群落，草原ではススキ群落，マツムシソウ群落，湿原群落に大別される。このうちこのレンゲツツジ群落が最も広大な地積を占め，根元直径8cmから10cm，樹高平均1.7mに達する地域も見られる。密度も高く，生育も盛んで大群落としては日本における分布の南限に当たるものである。なお，レンゲツツジは我が国特産の種で，北海道の西南部から九州の山地に分布する野生のツツジである。		
県	天然記念物	長束の蓮華松	ながつかのれんげまつ		広島市安佐南区長束二丁目	昭29.4.23			本樹は，山門を入った右手にあって，四方に展開する枝は蓮光寺の前庭約530㎡をおおっている。樹種はクロマツで3本の大枝から分かれる大小14枝が見られ，これらは24本の支柱によってほとんど水平に支えられ，陣笠状の樹冠を構成する。 寛政7年（1630）の植樹といわれ，広島藩主はその美しい樹形を称して，「近江唐崎の松」もはだしで逃げるであろうとの意味から本樹を「跣足唐崎松」と命名したと伝えられているほど名木の聞こえが高い。		
県	天然記念物	大岐神社のムク	おおきじんじゃのむく		呉市豊浜町字南立花	昭29.4.23			ムクは我が国西南部，朝鮮半島及び中国の平地丘陵地に普通に分布する落葉高木である。本樹は全国有数の巨樹で，よく発達した4条の板根（最大のものは長さ5.0m，厚さ0.9m）は熱帯樹のような景観を呈する。		
県	天然記念物	東城川の甌穴	とうじょうがわのおうけつ		庄原市東城町東城川河床	昭29.4.23			急流の河底の岩盤上に天然につくられた甌穴（おうけつ）は，地質的にも地形的にもいろいろの自然条件に支配されて，長年かかってつくられるものである。東城川の甌穴は，第三紀中新世（2300万～500万年前）の泥岩・砂岩・礫岩などの層からなる河底に，約3.5kmにわたって直径20cmから2mに及ぶ30個以上の甌穴群が8群存在しており，このうち東城川大橋から上流400m，下流300mが指定されている。甌穴の分布が他地域に比べて広域で，量・質共に豊富で学術的に価値の高いものである。		
県	天然記念物	新庄の宮の社叢	しんじょうのみやのしゃそう		広島市西区大宮一丁目	昭29.6.30			本社叢は，クスノキ・タブ・サカキなどの常緑広葉樹，ケヤキ・エノキ・ムク・ムクロジュなどの落葉広葉樹からなる社叢で，戦前の市内の樹叢の景観をとどめている。 クスの大木2本は，新庄の宮の夫婦楠で，東方のものは婦楠(おんなぐす)，西方のものは夫楠(おっとぐす)と呼ばれ，それぞれ胸高周囲5.35m，6.40mに達する。 新庄之宮神社は，社伝によると，正慶年間（1332～4）に紀州熊野神社の分霊をこの地に勧請したものと伝えられている。		
県	天然記念物	吉備津神社のサクラ	きびつじんじゃのさくら		三次市甲奴町宇賀	昭30.1.31			本樹は，日本南部に普通に自生するヤマザクラで，吉備津神社の社叢の前面に雄大な樹冠を浮きたたせている。サクラとしては県内有数の巨樹である。なお，このサクラの開花は古来この地方の苗しろづくり開始の指標となっている。		

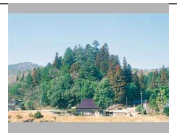
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	須佐神社のフジ	すさじんじゃのふじ		三次市甲奴町小童	昭30.1.31			本樹は，本州西部並びに四国九州に分布する日本特産種ヤマフジの白花品（シラフジ）である。社殿の北東方の林のそばにあり，2本のスギにからみついて登り，さらに隣接する他の1本のスギと1本のケヤキの樹冠をおおい，高さ25mに達する。フジでは県内有数の巨樹で，白い花が咲く。		
県	天然記念物	光永寺のカヤ	こうえいじのかや		三次市三和町上壱	昭30.1.31			本樹の主幹は，ほとんど真直ぐにのびており，地上9.5m付近で，西，南，北の三方向に初めて小枝を分かつ。それより約0.5m高でやや太い枝を北東方に出し，光永寺鐘楼をおおう。主幹は上に向って漸次細まるが，20m付近で急速に細くなる。樹勢は極めて旺盛で多数の果実をつける。本樹はカヤとして県内有数の巨樹であり，独立木の典型的な美しい樹形を示している。		
県	天然記念物	今高野山のカラマツ	いまこうやさんのからまつ		世羅郡世羅町甲山	昭30.1.31			カラマツは，我が国特産の落葉針葉高木で，宮城県，石川県及び静岡県を限界とする本州の中部地方のみに自生している。しかし，これまでに植林が成功しているのは中部以北の寒冷地方であり，中部以南の地で本樹のような巨木が見られることはまれである。本樹はカラマツとしては県内有数の巨樹であり，カラマツの独立木の代表的な樹形を示している。なお，文化年間（1804～1814）編の「西備名区」の中にも，今高野山の落葉松として本樹が記録されている。		
県	天然記念物	鶴亀山の社叢	つるかめやまのしゃそう		東広島市河内町恵能田	昭30.9.28			本社叢の一部は，常緑広業樹を主とし，各層にはアラカシが優占して，アラカシの純林（アラカシ・ヒサカキ分群集）の感があり，これにつる植物が加わって暖帯林の代表的な景観を呈している。この外の部分ではアカマツやツツジ科の植物が優位を占め，一部にイワヒバ・イワオモダカなども生育し，アオネカズラと共に本社叢の重要性を高めるものである。なお，八幡神社の前庭南東の隅には，根回り周囲4.8m，胸高幹囲4.2m，樹高約8mに及ぶアベマキの巨樹がある。		
県	天然記念物	油木八幡の社叢	ゆきはちまんのしゃそう		神石郡神石高原町油木字福本谷，字宮西谷	昭32.2.5			本社叢は，スギ・モミ・シラカシ・ホウノキ・イヌシデなどの樹種をもって構成され，この地方の原生林の景観を呈している。胸高幹囲1m以上の木は約750本の多きに達し，特にスギ，モミ，シラカシ，ヤマザクラ，ヤマモミジの県内有数の巨樹を含んでいる。なお元弘年中（1331～1334）に名和長年（なわながとし）がその従者3名と共に千本の苗木を植樹したと由緒書に記されている。		
県	天然記念物	竹田のゲンジボタル及びその発生地	たけだのげんじぼたるおよびそのはっせいち		福山市神辺町下竹田	昭33.8.1			下竹田の狭間(はざま)川流域のゲンジボタルは，竹田ボタルと呼ばれ，菅茶山の福山志料などに記されている。毎年5月中旬から6月中旬にかけて乱飛する。現地の人の話によれば，ゲンジボタルの最盛期には，その乱れ飛ぶいわゆるホタル合戦のさまは実に壮観で，通行人の顔に当たるほどであるという。しかし，近年は河川の改修，農薬の散布，流水汚濁等によって減少傾向にある。		
県	天然記念物	山波艮神社のウバメガシ	さんばうしとらじんじゃのうばめがし		尾道市山波町	昭34.7.15			ウバメガシは，我が国南西部の海岸地帯と中国大陸の南東部に融離分布する常緑のカシである。本樹は，地上約1.5mで大小数多くの支幹に分かれ，さらに南方にやや離れて三支幹が地面から出ているので，現状では一樹叢の観を呈するが，本来，単一の樹木であると考えられる。全国有数の巨樹である。本樹は指定時，海岸近くに位置していたが，その後，生育環境の悪化により北方300mの尾道造船（株）構内へ移植された。		
県	天然記念物	上湯川の八幡神社社叢	かみゆかわのはちまんじんじゃしゃそう		庄原市高野町上湯川字御所之沖	昭34.10.30			本社叢は県道を背にする平坦地に展開し，地積は比較的狭いが，スギを主として若干のモミ・カヤなどの針葉樹と，エノキ・ヤマモミジ・ミズキなどの落葉広葉樹からなる当地方の代表的な社叢である。胸高幹囲2m以上の樹木が45本あり，なかでも，胸高幹囲，及び樹高がそれぞれ6.0m，約36mのモミ，7.0m，約33mのスギは県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	南の八幡神社社叢	みなみのはちまんじんじゃしゃそう		庄原市高野町南字土居沖，字大鬼山	昭34.10.30			本社叢は，社殿周辺部と延長500mに及ぶ参道部の二部分からなる。社殿付近には胸高幹囲2m以上のスギ・モミ・クロマツ・ヤマモミジなど約20本がほぼ一団をなす。参道にも同様な幹囲のスギ・モミ・アベマキ・クロマツなどが並木をなしており，胸高幹囲2m以上の大樹だけでもその数は50本の多きに達する。わけてもモミは胸高幹囲5.02m，4.81m，アベマキは4.05mに達する県内有数の巨樹である。 元亨元年（1321），掛山(しとみやま)城の城主山内首藤通資(やまのうちすどうみちすけ)が，鶴が岡八幡宮を当地に祭るに当たって，植樹したと伝えられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	円正寺のシダレザクラ	えんしょうじのしだれざくら		庄原市高野町新市字荒神谷	昭34.10.30			シダレザクラは，その特異な樹形のために古来各所の社寺庭園などに栽培され名木となっているものが多いが胸高幹囲3mを超すものは少ない。本樹2株はシダレザクラとして県内有数の巨樹としてだけでなく，枝条が四方に展開して辺り一面をおおい，名木としてみるべきものがある。明暦3年（1657）住持乗覚（じょうかく）法師（円正寺11代）が植栽したと伝えられる。		
県	天然記念物	金屋子神社のシナノキ	かなやこじんじゃのしなのき		庄原市高野町新市字新市	昭34.10.30			シナノキは日本及び中国に自生する落葉高木であるが，特に東北地方と北海道に多い。その樹皮を布や綱の材料として利用するため，巨樹は極めて少ない。本樹は，主幹の胸高幹囲5mに達し，稀にみる巨樹である。地上約3m高で折損しているが，これに代わる大支幹が樹高約10mに達している。		
県	天然記念物	速田神社のツクバネガシ	はやたじんじゃのつくばねがし		甲日市市友田	昭35.3.12			ツクバネガシは暖地性のカシで，主として伊豆から南方及び中国地方に多く，美濃の木曽川沿いにはかなりの大木が見られる。本樹は速田神社の参道の手前に位置していて，基部に顕著な枝根（高さ2m）が発達しており，森林中にあるため樹高は大きく，末広がりの樹冠を形成している。ツクバネガシでは県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	灰塚のナラガシワ	はいづかのならがしわ		三次市三良坂町灰塚字池の迫	昭35.8.25			ナラガシワは東亜植物区系域に分布する植物で，日本で近畿・中国・四国・九州に多い。現在では天然林はほとんど見られず，本樹のような樹高約16m，胸高幹囲3.51mの巨樹は極めて稀な存在である。樹冠は西風の影響を受けて西から東に向って僅かに傾斜し，所在地の気象条件を指標する風成形を呈する。		
県	天然記念物	熊野神社のシラカシ	くまのじんじゃのしらかし		三次市畠敷町字宮本	昭35.8.25			本樹は，熊野神社境内の拝殿東南方にある樹高約25m，胸高幹囲約4.8mの大樹で，主幹は真直で基部も目立つほどには太っておらず，上方に向って次第に細くなる。地上約5m高で北方にやや大形の枝を出し，さらに2m上方で二大支幹に分かれる。各支幹は多数の枝条に分かれてうっそうとした樹冠を形成し，枝は下方に垂れて，地上2m高までに及ぶ。シラカシとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	山家のヒイラギ	やまがのひいらぎ		三次市山家町字本谷	昭35.8.25			ヒイラギは関東以西・四国・九州・沖縄・台湾に分布し，林地に自生する常緑広葉樹であるが，本樹は庭園木として植栽されたもので，樹高約10m，胸高幹囲1.85mである。主幹は僅かに南に傾き地上約2m高で三大枝に分かれ，樹冠は南側に傾いている。本樹は雌株で，ヒイラギとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	安国寺のソテツ	あんこくじのそてつ		福山市鞆町後地	昭36.4.18			ソテツは九州南部から琉球列島に分布する日本特産の裸子植物であるが，関東以西の各地で栽植され巨大な株に生長している名木大木が少なくない。本樹は，安国寺釈迦堂の背後の古い庭園の中にあり，安国寺恵瓊（えけい）が植えたと伝えられる。 本樹は樹高約9mで，二株からなり，第一株は根元より三方に分岐し根回り周囲5.4mにも及び，直立して最も高いものは9mにも達する。第二株は根回り周囲5.6mである。共にソテツでは県内有数の大木である。		
県	天然記念物	仏通寺のイヌマキ	ぶっつうじのいぬまき		三原市高坂町字伏龍窟	昭36.11.1			イヌマキは本州中南部，四国，九州及び沖縄に分布し，数十年以前には，各地にその径1.0m以上の大木が生育していたようであるが，本樹のように樹高約20m，胸高幹囲3.52mの巨樹は極めて稀である。雌株で，短楕円状の樹冠を形成し，樹勢は極めて旺盛である。 なお，本樹は仏通寺開山の愚中周及禅師のお手植と伝えられている。		
県	天然記念物	八栄神社の大ヒノキ （2株）	やさかじんじゃのおおひのき		山県郡北広島町岩戸字中宮，字小後	昭38.4.27			本樹二株は八栄神社参道の両側に生育しているもので，樹高は右が約25m，左が約39m，胸高幹囲は右が5.52m，左が4.2mである。石段下から見て左手のヒノキは根元北西側に窪んだ部分があるので「雌ヒノキ」と呼ばれ，右手のヒノキは根元北西側に直径20cm，長さ25cmの突出部があるので「雄ヒノキ」と呼ばれている。「雄ノキ」は突起が多い上に支根の発達が顕著で，偉観を呈する奇形樹である。二株ともヒノキとしては県内有数の巨樹である。		

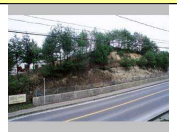
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	仙酔島の海食洞窟	せんすいじまのかいしょくどうくつ		福山市鞆町後地字仙酔島国有地（環境省）	昭41.9.27			仙酔島の地質は，全島中生代白亜紀（1億4300万年前～6500万年前）に噴出した流紋岩及び凝灰質岩により構成されている。本島周辺海岸の断崖には，ところどころに波浪の浸食作用をうけてできた大小の海食洞窟，洞門や離れ島が認められる。しかし，これらの洞窟や洞門の下底は，いずれも満潮水位面より約2～4mの高位にあって，現在は波浪の浸食作用をあまり受けていないものである。したがって，これらの海食洞窟や洞門は，有史時代又はそれ以前に形成されたもので，その後に海水面が低下したか，又は地盤が隆起して，現在に至ったものと推定される。		
県	天然記念物	仙酔層と岩脈	せんすいそうとがんみゃく		福山市鞆町後地字仙酔島国有地（環境省）	昭41.9.27			仙酔島の地質は，主として流紋岩質凝灰岩と流紋岩から構成されている。特に注目すべきは，田ノ浦から彦ノ浦に至る海岸道路沿いで，千人ガ丘南断崖下に，黒色頁岩・凝灰質頁岩・粟質砂岩などからなる堆積岩が発達する。その下層は，下位の流紋岩質凝灰岩と接し，層厚約15m。かつて小林貞一東大名誉教授により仙酔層と命名され，学界重視の地層である。仙酔層は，仙酔島の地質を構成する流紋岩質火山活動の休止期を表現する堆積岩で，凝灰質岩形成の環境を考察する上に重要である。なお，仙酔層と下位の凝灰質岩とは顕著な断層接触で，この断層に沿い，スペサルト岩として報告された岩脈の貫入が見られる。		
県	天然記念物	福山衝上断層	ふくやましょうじょうだんそう		福山市奈良津町、蔵王町	昭44.4.28			福山衝上断層は，西端福山市木之庄町から，東へ奈良津・蔵王城山を経て，東端は岡山県井原市篠城に至る延長14km続く。蔵王城山の被衝上体の礫層は洪積層なので，断層形成期は洪積世後期（約13万年前～1万年前）と考えられる。本断層は，国指定の船佐・山内逆断層帯と共に，洪積世あるいは現世にかけて起こった中国山地の隆起や瀬戸内低地帯の形成に関する学術上，貴重な資料である。		
県	天然記念物	西城浄久寺のカヤ	さいじょうじょうきゅうじのかや		庄原市西城町粟田	昭44.4.28			本樹は，樹高約22m，胸高幹囲3.98mで，主幹が直立し，枝の発達もよく，樹勢はすこぶる旺盛で多数の果実をつける。カヤとしては県内有数の巨樹である。なお本樹は永禄年間（1588～1570），大富山城主宮高盛が菩提寺を建立した際に植樹したと言われる。		
県	天然記念物	御調八幡宮の社叢	みつきはちまんぐうのしゃそう		三原市八幡町宮内宮地側	昭45.1.30			本社叢は三原市北方の八幡山の東斜面，海抜260m～300mのところにあるシイを主とする社叢である。 広島県内では，沿岸部から海抜600mぐらいの山間部までの間は暖帯林の発達する地域で，常緑広葉樹が見られるが，大部分は破壊されたアカマツの二次林におきかえられているところが多い。本社叢の群落組成からみると，シイ林は，遷移の最終段階（極相）に達したものといえ，県内に残された数少ないシイ天然林の代表的なものである。		関連施設：御調八幡宮宝物収蔵庫 （0848-65-8652）
県	天然記念物	上布野・二反田逆断層	かみふのにたんだぎゃくだんそう		三次市布野町上布野河名原，同大谷 三次市君田町石原字二反田	昭45.1.30			双三郡君田村の神之瀬川々畔から，同村二反田を経て布野村上布野の布野川々畔に至る延長6kmの東西系の一線を境に極めて顕著な地形変化が認められる。地形学上予想される断層線上の，布野村上布野町大谷川々岸，同戸河内寺谷，二反田新木谷川々床，同石原茂田川々岸，同西入君神之瀬川西岸等で断層露頭が観察されるが，それらは断層面傾斜の大なる逆断層で，北側の流紋岩・花こう斑岩などの基盤岩が南側の第三紀中新世（2300万年前～500万年前）備北層群上へ押し上げている。洪積世（170万年前～1万年前）末に形成された逆断層である。また断層落差は上布野で約250m，二反田で約90mと推定されるなど，中国山地形成の地殻変動史を明らかにするための重要な学術資料である。		
県	天然記念物	宇津戸領家八幡神社の社叢	うづとりょうけはちまんじんじゃのしゃそう		世羅郡世羅町宇津戸字宮沖，同字松ケ鼻	昭46.4.30			本社叢は海抜320mのところにあるウラジロガシ，ツクバネガシを主とする樹林で，大径木のほか，多数の小径木が生育して常緑カシ林の自己維持性が認められる。県内の社叢における常緑カシの組合せには，シラカシ型，シラカシーツクバネガシ型，シラカシーアラカシ型，ウラジロガシ型，ツクバネガシ型等があるが，本社叢はウラジロガシーツクバネガシ型ともいうべきもので，常緑カシ類の植物分布地理学的見地からも，植物社会学的見地からも重要なものである。		
県	天然記念物	佐々部のカキノキ	ささべのかきのき		安芸高田市高宮町佐々部字野部	昭46.12.23			本樹は樹高約12m，胸高幹囲2.32mで，樹勢は極めて旺盛であり，大枝はよく分枝して，著しく横に展開し，小枝は低く垂下して，果樹とは思えない自然の樹形を呈する巨樹である。 なお，安芸国においては，享保年間（1716～1736）にカキの渋を搾るため渋柿を植樹することを布令している。		
県	天然記念物	神原のシダレザクラ	かんばらのしだれざくら		広島市佐伯区五日市町石内字神原小字京農	昭48.3.28			シダレザクラはエドヒガンから作られた園芸品種で，名のごとく枝が垂れ下がるのが特徴である。どちらかと言えば寒冷の地を好むため，本州中部以北ではかなりの大木も見られるが，沿岸地に近い温暖なこの地に，これだけの大木（樹高約10m，胸高幹囲2.42m）があるのは珍しい。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	横目堂のイチイ	よこめどうのいちい		庄原市川西町	昭48.3.28			本樹は，横目堂の前庭の小高いところに生育し，樹高約7m，胸高幹囲1.9mである。当初はキャラボク型に仕立てられたものと推定されるが，現在は北面から東南にまわる部分を占める半球形の樹冠を呈している。樹幹上には多数のコケ類が着生している。本樹は人里近くに生育するイチイとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	諏訪神社のシラカシ林・コケ群落	すわじんじゃのしらかしばやし・こけぐんらく		庄原市高門町字諏訪の前	昭48.3.28			本社叢は中国地方の内陸部を代表する常緑広葉樹のシラカシのほぼ純林とも言えるもので，その外形はほぼ半球状を呈し，周辺の一部にはマント群落がよく発達している。社叢内部に発達するコケ類は50数種に上り，社殿周辺の広場及び巾2～3mの環状道路に発達するコケ群落は，人為的に発生したものとはいえ実に見事なものである。		
県	天然記念物	下豊松鶴岡八幡神社社叢	しもとよまつつるがおかはちまんじんじゃしゃそう		神石郡神石高原町下豊松字和部山	昭50.4.8			本社叢は，スギの大木と近郷には珍しい原始性を有した神石高原の代表的なシラカシ林が特長である。高木層は主としてシラカシで，亜高木層も低木層も共にこの種の若木で占められている。草本層にはナライシダが優勢である。社殿周辺に9本の巨樹があり，最大のスギは樹高約30m，胸高幹囲5.95mで，スギとして県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	海田観音免のクスノキ	かいたかんのんめんのくすのき		安芸郡海田町東海田字観音免	昭50.4.8			本樹は樹高約29m，胸高幹囲6.4mで，主幹は，地上1.55mで東西の二大支幹に分かれ，地上7mのところで分岐が始まって，よく繁茂した大きな樹冠を形成し，一見，森のように見える。枝を切った跡が散在するが，樹勢は極めて旺盛である。本樹は，県天然記念物，新庄の宮の社叢（広島市）のクスノキに匹敵する県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	板井谷のコナラ	いたいだにのこなら		庄原市東城町小奴可字板井谷	昭51.6.29			コナラは日本と朝鮮半島に分布する落葉広葉樹である。本樹は，樹高約24m，胸高幹囲4.28mで，地上2～5m高のところで14本の支幹に分岐し，最下の二支幹はほとんど水平に，他の支幹は斜め上方に伸びて，独特の枝振りをした壮大な樹冠を形成している。コナラとして県内有数の巨樹である。なお，本樹の根元に愛宕神社の小さな祠があり，たたら防火の神木としてあがめられてきたことは，民俗学的にも興味深い。		
県	天然記念物	小奴可の要害桜	おぬかのようがいざくら		庄原市東城町小奴可字要害	昭51.6.29			本樹の樹種は，エドヒガンで，ウバヒガン又はアズマヒガンとも呼ばれ，本州・四国・九州・朝鮮半島南部及び中国中部に分布する。本樹は樹高約17mで，サクラとして県内有数の巨樹である。付近に海抜563mの山城跡（亀山城跡）があり，西側の麓が居館跡と伝えられ，その一角に本樹があるところから，地元の人々に「要害桜」の名で呼ばれている。		
県	天然記念物	出店権現のウラジロガシ	でみせごんげんのうらじろがし		安芸高田市美土里町生田字出店原	昭51.6.29			ウラジロガシは西南日本の暖地に見られるが，他の常緑広葉樹に比し高海抜の地域にまで分布する。本樹は，樹高約19m，胸高幹囲7.47mで，根元から大小6本の支幹に分岐しているが，本来単木であったものが分岐したというよりは，寄植えしたものと思われる。樹勢は旺盛で，壮大な樹冠を形成し，遠くから眺めると一つの樹叢のように見える。		
県	天然記念物	摺滝化石植物群（暁新世）産地	すりたきかせきしょくぶつぐん（ぎょうしんせい）さんち		三次市作木町森山西	昭51.6.29			作木村摺滝川折戸橋南岸村道沿いの長さ11m，高さ3mの切取面に，砂質凝灰岩と薄層理を示すシルト質凝灰岩との互層が露出している。昭和27年（1952）の植物化石発見を契機に調査研究が盛んに行われ，摺滝化石植物群は学界の注目を引くようになった。 本指定地は，我が国における希少な暁新世（6500万年前～5700万年前）植物群であり，摺滝層形成時代に火山活動が激しかったこと や，植物を保持した湖水等，当時の自然環境も明らかになり，地質学上，古生物学上貴重な価値を持つ。		
県	天然記念物	馬木八幡神社の社叢	うまきはちまんじんじゃのしゃそう		広島市東区安芸町馬木	昭53.1.31			本社叢はシイを主とする常緑広葉樹林で，コナラ，アベマキ，コシアブラなどの落葉樹もいくらか混生しているが，この地方の暖帯極相林の原形をほぼ保っている。本社叢に多く見られるシイモチは，中国地方西部及び九州に分布する常緑高木で広島市から山口県下の島嶼や沿岸部のシイ林に普通に見られるが，広島市付近及びそれより北の地域では極めて珍しい。また，林床にジュズネノキ（常緑小低木）が多いものもあまり例がなく注目に値する。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	湯木のモミ	ゆきのもみ		庄原市口和町湯木	昭53.1.31			本樹は，海抜305mの山麓部に位置し，モウソウチク林内に高くそびえている独立樹(樹高約32m，胸高幹囲6.1m)で，遠くからでもよく目立つ。主幹は南東に傾き，地上から10mくらいのところから主な枝が出始め，広卵形の樹冠を形成する。モミは一般に短命で100年から200年で枯死する場合が多いが，本樹は優に300年以上経ていると思われ，モミとしては全国有数の老樹である。		
県	天然記念物	大屋のサイジョウガキ	おおやのさいじょうがき		庄原市西城町大屋	昭53.1.31			サイジョウガキは東広島市西条町寺家長福寺に原木があったと伝えられているが，別の西城町に本樹のような大樹が存在することは興味深い。 本樹は樹高17mで，主幹は地上から4m辺りで3本の支幹に分かれ，横径20m内外の樹冠部を形成していたが，平成3年(1991)の台風により折損し，現在は主幹部だけが残っている。カキノキとして県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	仁賀のシラカシ群	にかのしらかしぐん		三次市三良坂町仁賀	昭53.10.4			シラカシは常緑カシ類では最も寒気に強く，広島県では県北に近い内陸部に分布し，この地方の代表的なカシである。本シラカシ群は，樹高約20～30m，根回り周囲5.83mのものを主木に7本のシラカシが叢生し，一団となって樹冠を形成して特異なシラカシの森を示している。なお，主木はシラカシとして県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	北村神社の巨樹群	きたむらじんじゃのきょじゅぐん		庄原市西城町三坂	昭53.10.4			道後山の麓にある北村神社境内(413㎡)には見事な巨樹群が形成されている。イチイ・スギ・トチノキ・エノキの4樹は稀にみる大木で，樹高は，イチイ約17m，スギ約27m，トチノキ約22m，エノキ約22m，クヌギ約23m，オオモミジ約20m，胸高幹囲は，イチイ4.4m，スギ3.85m，トチノキ4.15m，クヌギ1.96m，オオモミジ2.35mである。樹齢はいずれも300年を超えるものと推定される。		
県	天然記念物	平子のタンバグリ	ひらこのたんばぐり		庄原市西城町平子	昭53.10.4			クリは日本特産の落葉高木で，北海道西南部から九州屋久島に至る山地に分布している。タンバグリは丹波国(現兵庫県)原産の果実の大きい品種で，県内でも各地に植栽されている。本樹は樹高約15m，胸高幹囲5.1mで，主幹は地上4mから分枝が始まり，よく繁った円い樹冠を呈している。樹勢は極めて旺盛で着果も良好である。クリとしては全国有数の巨樹である。		
県	天然記念物	垂水天満宮のウバメガシ群落	たるみてんまんぐうのうばめがしぐんらく		尾道市瀬戸田町垂水	昭53.10.4			本群落は，生口島西側の龍甲山(海抜約30m)内にある天満神社(垂水天満宮)参道の両側，南東及び南西斜面に発達している。樹高5～15mのアカマツが散生するが，ウバメガシが優占し，ほとんど純林の感がある。本群落は，群落の規模としてそれを凌駕し県内有数のものである。地上50cmの幹囲が1mを超える大木も見られ，本地方の海岸急傾斜岩地に特有なウバメガシ天然林の面影を留めるものとして貴重な存在である。		
県	天然記念物	阿弥陀寺のビャクシン	あみだじのびゃくしん		尾道市向島町岩子島	昭53.10.4			本樹は，樹高約16m胸高幹囲2.7mで，植栽されたものと思われるが，すでに県指定となっているビャクシンに比べて，直立性で，豊かに発達した枝葉が大きな広卵形の樹冠を形成し，樹勢も極めて旺盛である。かなりの巨樹である上，本種の生育形の一つを代表するものとして植物学的に価値が高い。		
県	天然記念物	唯称庵跡のカエデ林	ゆいしょうあんあとのかえでばやし		安芸高田市甲田町上甲立	昭53.10.4			県史跡五龍城跡の山麓を流れる本村川右岸に唯称庵跡があり，その敷地内に目通り幹囲0.3～3.3m，樹高7～20mのカエデ(イロハモミジ，一部ヤマモミジ)が約40本ある。そのうち，護岸約100mの間には，大きい25本が一列に並んで見事なカエデ林を形成している。文政6年(1823)，唯称庵主本励上人が京都高雄から取り寄せたと伝えられているが，唯称庵境内の風致，護岸強化のために，栽植されたものであろう。		
県	天然記念物	原田のヤマナシ	はらだのやまなし		安芸高田市高宮町原田	昭54.3.26			ヤマナシは関東以西の西南日本の暖・温帯に自生し，朝鮮半島・中国に分布する落葉高木である。 本樹のように樹高約13m，胸高幹囲2.17mの巨樹はヤマナシでは稀であると言われており，全国有数の巨樹であるばかりでなく，ヤマナシの純野生種と現在の栽培種との中間型と見られることから，園芸上貴重である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	土師のチュウゴクボダイジュ	はじのちゅうごくぼだいじゅ		安芸高田市八千代町土師字権現	昭54.11.2			本樹は八千代町の土師ダム左岸に生育している落葉樹で，樹高約18m，胸高幹囲は0.96m，1.08m，0.93mである。昭和47年（1972）当時新種として発表されたもので，中国地方のボダイジュという意味からこの名がある。県内には単にボダイジュと呼ばれる中国大陸原産の種があるが，それに比べると葉が大きく，緑の鋸歯がやや細かい。本来1株のものが3本立ちになったものである。		
県	天然記念物	宍戸神社の社叢	ししどじんじゃのしゃそう		安芸高田市甲田町甲立字加屋	昭54.11.2			本社叢は海抜約280mの小丘にあり，モミ・スギ・ヒノキなどの針葉樹と常緑広葉樹のシラカシによって形成されている。人為がかなり加わってはいるが，胸高幹囲2mを超えるモミの大木が十数本もあり，また，シラカシが多く，広島県内陸部に発達する森林の本来の林相（シラカシ・モミ）をよくとどめており学術上貴重なものである。		
県	天然記念物	敷名八幡神社の社叢	しきなはちまんじんじゃのしゃそう		三次市三和町敷名	昭55.1.18			本社叢は海抜約450mの山麓にあり，ヒノキ・スギ・アカマツ・モミ林などから構成されているが，主体はモミ林である。このモミ林は日本の中間温帯（中間針葉樹林帯）を代表する森林で，この地方本来の自然林の名残を示すものである。一般に県内の内陸部の社叢はシラカシは少なく，それに代ってウラジロガシが多いのも興味深く，学術上貴重な社叢である。		
県	天然記念物	亀山八幡神社のツガ	かめやまはちまんじんじゃのつが		神石郡神石高原町小畠	昭56.4.17			旧神石郡三和町役場のすぐ西側にある亀山八幡神社の境内入口から石段を数段登って鳥居をくぐると，すぐ右横にツガの大木がそびえている。本樹は樹高約30mで，主幹は，下の方がわずかに南へ傾き，地上4m辺りで第一枝が北側に伸び，その他数本の枯損した枝の跡が見られる。地上約10mの辺りから樹冠が密になって拡がり，全体はほぼ卵形を呈している。主幹下部の樹肌は凹凸が多く，ツルマサキやコケ類が着生している。樹齢はおそらく300年に近いであろう。		
県	天然記念物	教西寺のツバキ	きょうさいじのつばき		神石郡神石高原町時安	昭56.4.17			教西寺本堂に向かって左寄りの前庭にある。樹高約8mで，主幹はやや南へ傾き，地上3m辺りで6支幹に分かれ，それらがさらにほうき状に密に分枝して，西南方に偏った円い樹冠を形成している。主幹には瘤状の突起が多くあり，支幹や枝には，ノキシノブ，フユヅタ，コケ類などが多く着生して，古木の風格を備えている。樹勢は極めて旺盛で，例年3～4月に開花し，ある一枝には白斑の入った花が咲くという。樹齢は，少なくとも500年は経っていると推定される。広島県だけでなく，全国にみても有数の巨樹であろう。		
県	天然記念物	西酒屋の備北層群大露頭	にしさけやのびほくそうぐんだいろとう		三次市西酒屋町字抜湯	昭56.11.6			備北層群大露頭は第三紀中新世中期（1600万～1400万年前）のもので，海成備北層群と非海成塩原町累層が一連整合であることが実証された。備北層群は県北に広く分布する地層であり，この大露頭からはカキや巻貝などの化石を始め径10cm前後のコハクが数多く産出されている。備北層群と塩原町累層の一連の地層がこの大露頭で観察できる場所は他に例がなく，備北層群の形成史を知る上で重要である。		
県	天然記念物	福成寺の巨樹群	ふくじょうじのきょじゅぐん		東広島市西条町下三永	昭57.10.14			西条盆地南東部の山上，海抜約500mに位置する福成寺の境内にクロガネモチ（1株），トチノキ（1株），モッコク（1株），スギ（2株）の巨樹がある。モッコクは自生か植栽か分からないが，他の木は植栽されたものと思われる。県内有数の大木で，いずれも数百年の樹齢を経ていると推定される。一寺院の境内にこれだけの大木がそろっていることは珍しく，学術上貴重な存在である。また，これらの木は土地の人々に崇敬されて大切に保護されながら，福成寺への信仰と共に生き延びてきたもので，歴史的にも意義が深い。		関連施設：福成寺宝物収蔵庫（082-426-0523，082-423-3486）
県	天然記念物	都志見のアスナロ	つしみのあすなろ		山県郡北広島町都志見	昭58.3.28			旧豊平町役場の東方約300mの西向き斜面の丘にアスナロの独立木がある。「明日ヒノキになろう」が語源とされているアスナロは，ヒノキ科の常緑針葉樹高木で，ヒノキに似ているが遥かに幅広である。都志見のアスナロは植栽されたものであるが，生育環境の厳しさも考慮に入れて樹齢は約250年と推定される。樹高約19m，胸高幹囲2.8m。		
県	天然記念物	熊野新宮神社の大スギ	くまのしんぐうじんじゃのおおすぎ		山県郡北広島町志路原	昭58.3.28			熊野新宮神社の社叢はスギを主とする木立で，本樹はその中で一番目立つ大木である。樹高約39m，胸高幹囲6.7m，推定樹齢500年である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	三次の地蠣産地　※蠣は旧字	みよしのちろうさんち		三次市高杉町来原	昭58.11.7			三次産地蠣は，馬洗川にかかる神和橋から下流の250mの来原河原で発見された我が国で最初の天然産の蠣である。外国での地蠣は第三紀（6500万年前～180万年前）以前の地層で油田や炭田に関係なく，第四紀層（約4万年前）の地層から産出した点で新しい型の産地であり，学術上貴重な価値がある。		
県	天然記念物	梶ノ木の大スギ	かじのきのおおすぎ		山県郡安芸太田町梶ノ木	昭59.1.23			梶ノ木の集落の最上部に近いところにある墓地に梶ノ木の大スギがある。本樹は樹高約36m，胸高幹囲10.13mの県内有数の大スギで，推定樹齢800年以上と考えられる。		
県	天然記念物	菅のムクノキ	すげのむくのき		尾道市御調町菅字竹ケ迫	昭59.1.23			ムクノキは関東地方以南の暖地に成育し，台湾，中国大陸南部及びインドシナ半島まで分布する落葉広葉高木である。 菅のムクノキは，御調町の中心部である市の東方約3kmの地点にある菅の集落内の比較的高い位置にある。本樹は，樹高24.38m，胸高幹囲4.68mで，県内有数のムクノキの巨樹であ，熱帯降雨林の樹種などに多く見られる板根が良く発達しており，学術上の価値は高い。		
県	天然記念物	仁野のナナミノキ	ここのななみのき		尾道市御調町仁野字岡田沖	昭59.1.23			ナナミノキ（別名ナナメノキ）は関東地方以西の近畿，中国，四国及び九州の諸地方に生育し，中国にも分布するモチノキ科の常緑広葉高木である。南向きの緩斜面の畑地帯の中腹にある仁野谷観音堂の境内にあり，樹高約17m，胸高幹囲2.64mを測り，県内最大級の規模である。		
県	天然記念物	祝詞山八幡神社のコバンモチ群落	のりとやまはちまんじんじゃのこばんもちぐんらく		東広島市安芸津町風早字九日面	昭59.11.19			祝詞山八幡神社の社叢は，植栽されたと見られるヒノキを別にすれば，高木層はシイノキで占められ，亜高木層と低木層はコバンモチで占められている。 シイノキは，我が国の暖帯林（常緑広葉樹林，照葉樹林）を代表する森林で，福島県及び新潟県以南の暖地に発達している。本社叢は，植物社会学的にはシイノキ－コバンモチ群集に含まれるが，この群集は本来関門海峡を挟む北九州沿岸と山口県沿岸に良く発達している。しかし，三津湾沿岸のものはその飛地的な存在であり，学術上の価値は高い。		
県	天然記念物	川尻のソテツ	かわじりのそてつ		呉市川尻町川尻	昭59.11.19			川尻のソテツは樹高約7mの雌株で，主幹に沿って小枝が重なりあうのに反して，支幹上の子株は極めて少なく，第6支幹の下部に直径が5～10cmのものが，数個見られるだけである。諸所にノキシノブが着生している。川尻のソテツの根元周囲6.1mの大きさは，国指定のソテツの天然記念物に伍して遜色がない大きさである。		
県	天然記念物	大原のクロガネモチ	おおはらのくろがねもち		江田島市大柿町大原字峰	昭60.3.14			クロガネモチは，関東以西の本州，四国，九州，済洲島，琉球列島，台湾，中華人民共和国からインドシナ半島の暖帯ないし亜熱帯に自生する雌雄異株（正しくは雑株）の常緑広葉樹で，国内の巨樹は植栽木に多い。 大原のクロガネモチは，樹高17.16m，胸高幹囲3.9mの県内有数の巨樹で，国指定のものに劣らない大きさであることの外に，樹幹基部の異常肥大が学術上注目すべき資料であることも認められて県指定となった。特色ある根張りの例には，熱帯の湿性密林の巨樹に見られる板根があり，西日本のエノキ・ムクノキ・シイノキなどにその面影が見られる。		
県	天然記念物	井永のシラカシ	いながのしらかし		府中市上下町字井永	昭60.12.2			JR上下駅の南東約2.6kmの地点に井永八幡神社がある。社殿は南面する丘のやや高いところにあり，その前面にシラカシが繁っている。そのうち社殿の南西方の斜面上部にあるのが対象のシラカシである。井永八幡神社のシラカシには，樹高約15m，胸高幹囲4.5mの巨樹で，主幹の空洞化や木材腐朽菌の着生などが見られるが，枝葉は旺盛に繁茂している。		
県	天然記念物	矢野のケンポナシ	やののけんぽなし		府中市上下町字矢野	昭60.12.2			ケンポナシは落葉広葉樹で，本州，四国，九州に自生し，北海道の奥尻島や朝鮮半島，台湾，中国大陸及びヒマラヤに分布する。 矢野のケンポナシは，JR上下駅から南西方約2.5kmの地点にある福泉寺境内にあり，樹高約29m，胸高幹囲2.25mで，樹勢も盛んな県内最大級の大樹である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	東酒屋の海底地すべり構造	ひがしさけやのかいていじすべりこうぞう		三次市東酒屋町敦盛	昭60.12.2			海底地すべり現象を示す東酒屋の露頭は，「備北層群の大露頭」の南東約2kmの位置にあり，化石を多産している「備北層群の大露頭」の上部層に相当する地層である。海底地すべり構造の見られる地層でこれほどの大規模なものや，その地すべり構造の多様性をもつものは広島県では他に例がなく，学術上極めて貴重なものである。		
県	天然記念物	吉田のギンモクセイ	よしだのぎんもくせい		三原市久井町吉田	昭61.11.25			ギンモクセイは，植物学的にはキンモクセイ，ウスギモクセイの母種として取り扱われている中国原産の常緑小高木である。葉には細かい鋸歯があり，白色の花をつける。 吉田のギンモクセイは樹高約12mで，樹の大きさから樹齢400年内外は経過していると推定される。ギンモクセイの大木は比較的少なく，全国的にも有数の老大木であると思われる。		
県	天然記念物	勘原のオガタマノキ	あぞうばらのおがたまのき		三原市久井町勘原	昭61.11.25			本件のオガタマノキは，胸高幹囲1.97mで，現在知られている限りでは広島県内第1位の巨樹である。旧勘原村の割庄屋であった所有者の栗原家は，明治初年に起きた百姓一揆の際襲撃を受け，母屋が焼打ちされた。この時，このオガタマノキの母屋側の主幹部が焼けて損傷を受けたと伝えられているが，のち樹皮が再生して傷口をふさぎ，縦の亀裂となって過去に焼けた部分の痕跡をとどめている。百姓一揆の歴史の一断面を物語る証人としても意義が大きい。		
県	天然記念物	本宮八幡神社の社叢	ほんぐうはちまんじんじゃのしゃそう		東広島市豊栄町乃美字宮迫	昭62.12.21			本宮八幡神社は，豊栄町と福富町との境界にそびえる西原山（733.5m）の東側にある海抜400m内外（付近の平野との比高約25m）の丘陵地に位置し，その内側参道及び社殿の周囲に，主としてモミ，スギ，ヒノキ，ツクバネガシ，ウラジロガシなどからなる見事な社叢が発達している。 モミとカシ類は社叢の全域にわたって，ほぼ一様に分布しているが，スギは主として社殿から前方の区域に，ヒノキは主として後方に見られる。広島県内陸部の，モミやスギが優先する社叢では，シラカシが出現することが多いが，本社叢では，シラカシは全くなく，代ってツクバネガシが多く生じ，次いでウラジロガシがかなり見られる。また，本神社社叢にはスギの大木が多く，胸高幹囲3mを超えるものが十数本見られる。最大の木（美人杉又は千年杉と呼ばれている）は，胸高幹囲8.4mにも達し，県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	畝山神社の巨樹群	うねやまじんじゃのきょじゅぐん		東広島市豊栄町清武字黒岩	昭62.12.21			豊栄町のほぼ中央，海抜約400m（近くの鍛冶屋集落との比高約20m）のところに畝山神社があり，神楽殿のある細長い広場にはツクバネガシ，スギ，ヒノキの巨樹が見られ，社殿の周囲にも，ツクバネガシ，ウラジロガシ，スギ，コウヤマキ，クロマツなどの巨樹が見られる。ツクバネガシとウラジロガシは，この地方の気候的極相である自然林（モミーカシ林）を構成する代表的樹種であり，現在地に自生していたものが残されて，保護されてきたと思われる。		
県	天然記念物	洗川の谷渡り台杉	あらいがわのたにわたりだいすぎ		山県郡安芸太田町洗川	昭62.12.21			旧JR戸河内駅の太田川をへだてた真向かいの集落が粒谷（つぶたに）である。ここには真北の集落梶ノ木方面から洗川が流れ込み，それに沿って梶ノ木に通ずる道路がある。これを3kmほど北上した地点で右岸の谷に入り，200mほど溯ると，目的の台杉によって行手は遮られる。 谷を横切る「杉並び」は大小12本からなり，両端の2本ずつはそれぞれ互いに地下部で繋がっているが，「谷渡り台杉」とは直接的な関係はないようである。本物件は倒れた杉が谷の向こう側に達し，その梢（こずえ）から発生した枝が地中に根を下ろして成木となっている大変珍しい例であるばかりでなく，元木上に並ぶ4本の幹は元木の根元に近いものから先の方に向かって順次小さくなっているのに，先で根を下ろした幹の樹勢は旺盛である事実，すなわち水分も養分も元木を逆流しないことを示す極めて貴重な例でもある。		
県	天然記念物	艮神社のクスノキ群	うしとらじんじゃのくすのきぐん		尾道市長江1丁目	昭63.12.26			艮神社は千光寺山麓，海抜12～20mに位置している。境内には，拝殿の東方に1株（1），社殿南側の階段状に並んだ台地の1，2，4段にそれぞれ1株計3株（2，3，4），合計4株のクスノキが大きな樹冠を広げている。それぞれ樹木の状況は次のようである。 （1）…神社の入口を入ってすぐ右側，拝殿の東前方に位置する最も大きい株である。主幹は地上2.7～3.2mの所で，太さの違う3支幹に分かれる。樹皮上にはコケ類が多数着生している。 （2）…南側階段台地の第1段，社殿寄りにある巨岩の横に生じ，樹幹がやや東に傾いている。 （3）…第2段にあり，樹幹はほぼ直立する。 （4）…最上段の北寄りにあり，（3）の株とほとんど同じ大きさである。		
県	天然記念物	領家八幡神社の社叢	りょうけはちまんじんじゃのしゃそう		庄原市総領町下領家	平1.11.20			旧総領町役場の県道を東へ約600m行った所の山麓（海抜約280m）に領家八幡神社があり，その背後の南西向き急斜面によく茂った常緑広葉樹を主とする社叢が発達している。シラカシが優占するが，場所によっては針葉樹のカヤがかなり顕著に出現する。オオモミジ，アベマキ，シデ類などの落葉広葉樹も混生する。下層にはヤブツバキとアオキが多い。 広島県内陸地域にある社叢にはシラカシがよく出現するが，本社叢はそのシラカシが顕著に優占する森林で，本地方の山腹傾斜地に発達するシラカシ自然林の典型的な姿を保っている。シラカシの稚・幼樹も多く生じており，持続性のある安定群落と考えられる。胸高幹囲2mを超えるシラカシの大木が30本も見られることは，本社叢が昔から人為の影響をあまり受けないで保護されてきたことを示している。		
県	天然記念物	迦具神社の大イチョウ	かぐじんじゃのおおいちょう		三次市作木町香淀字神田	平2.12.25			作木町南部の香淀にある迦具神社のイチョウは，樹高約32m，胸高幹囲7.28mで，四方に枝を広げてその樹冠は舞殿と拝殿の両方の建物にまでかぶさっている。樹冠はほうき状に開いた上半部と，球状にまとまった下半部とに区分される。樹齢約500年と推定される。 この樹の下半部の球形の樹冠は，主幹の分岐部付近から発生した不定芽の繁茂したものと認められ，ここには，ラッパ状，コップ状，フクロ状などと表現される鰐形葉（きけいよう）すなわち杯葉（杯状葉）が見られる。県内有数のイチョウの巨樹であるばかりでなく，杯葉をつける点で全国的にも珍しい例である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	森山のサイジョウガキ	もりやまのさいじょうがき		三次市作木町森山中字西谷	平2.12.25			森山のサイジョウガキは，樹高約22m，胸高幹囲（地上1.3m高）3.44m，樹高22.00mで，3.5～4.0m高で大小の4支幹に分かれて上向きに伸び，更に上方で小枝を分けて，短円筒形の樹冠を構成していた。推定樹齢350年。		
県	天然記念物	下領家のエドヒガン	しもりょうけのえどひがん		庄原市総領町下領家	平3.12.12			本樹は，犬か丸山（標高620m）の南方で，海抜約530mの所にある。本樹は，樹高約20m，胸高幹囲6.67mである。主幹は地上2.2mで南・北の二支幹に分かれるが，南側の支幹は枯損し，長さ約3.5mの根元部が残っているにすぎない。北側の支幹は地上約4m辺りでさらに二岐するが，片方の枝は枯れ，長さ3mばかりが残る。樹幹にはオシャグジデンダ，ノキシノブ，コケ類が着生している。 エドヒガンは，日本（本州，四国，九州），朝鮮半島南部，中国大陸中部に分布するサクラで，日本の各地に巨樹名木が知られている。しかし，それらの大部分は中部地方以北であり，中国地方で，本樹のような，全国的にみても有数の巨木が見られることは珍しい。		
県	天然記念物	行縢八幡神社の大木群	むかばぎはちまんじんじゃのたいぼくぐん		府中市行縢町鍋島	平3.12.12			本神社の社叢は，社殿の周辺に，ツガ，カヤ，アラカシ，シラカシ，ヤブツバキなどがかなりの大木になって成育しており，低木層に見られるシキミ，シロダモ，アオキ，ネズミモチなどと共に，中間帯自然植生の名残を留めている。 本神社の社叢は，一部の樹木に自然植生の面影を留めているとはいえ，群落としては不完全である。しかし，これだけの大木がまとまって成育し，しかも分布生態の上で興味深い樹木を含んでいることは，学術的に価値が高い。		
県	天然記念物	本山のシャシャンボ	もとやまのしゃしゃんぼ		豊田郡大崎上島町中野	平4.10.29			大崎上島町北西部にある本山（海抜123m）の南西側山腹，海抜40mの所にある個人宅に近接する土手にシャシャンボの大木がある。樹高は約6m，不規則な瘤状の基部から4本の支幹が曲がりくねって伸び，さらにいくつかの枝を分かって，東西5.5m，南北6.8mの樹冠を形成している。 シャシャンボはツツジ科の常緑低木で，東アジアの暖地に広く分布するが，日本では，関東地方以西に産し，日当たりの良い尾根筋や林縁に生ずる。樹高は普通5m以下で，幹の直径が20cmを超えることは稀で極めて珍しく，県内最大級のものである。		
県	天然記念物	楠神社のクスノキ	くすのきじんじゃのくすのき		竹原市忠海町宇明神原	平4.10.29			楠神社のクスノキは，社殿の背後（北）にあり，地面に浮き出た，周囲約21m根張りを土台にして主幹が生じ，地上4m辺りで4本の支幹に分かれ樹高は約32mを測る。 クスノキは関東地方以西の低地に生ずる常緑広葉樹で，特に太平洋及び瀬戸内海の沿岸地域に巨樹が多い。済州島，台湾，中国南部，インドシナにも分布する。昔から聖木として神社の境内に植えられることが多く，本神社ではクスノキが御神体のような形になって社殿の背後に立ち，主幹には注連縄が張られている。		
県	天然記念物	千鳥別尺のヤマザクラ	ちどりべっしゃくのやまざくら		庄原市東城町千鳥字別尺	平6.2.28			東城町の北東部にある寺ヶ成山（922.2m，集落との比高300m内外）の南東山麓，海抜650m辺りの，田畑の間に残された草地にヤマザクラの巨樹が生育しており，遠方からでもその全形を見ることができる。本樹は，樹高約27mで，胸高幹囲4.6mで，主幹は地上2mで東・西の2支幹に分かれ，西支幹はさらに1m上で2岐する。それはさらに密に分岐して，ほぼ球状の整った樹冠を形成している。 ヤマザクラは，本州，四国，九州，朝鮮半島南部に分布し，広島県内でも極く普通に見られる。エドヒガンは巨樹が少なく，胸高幹囲4.5mを超えるものは全国的にもあまり多くない。		
県	天然記念物	森湯谷のエドヒガン	もりゆだにのえどひがん		庄原市東城町森字細谷	平6.2.28			東城町西部に海抜1009.4m（集落との比高400m内外）の飯山がある。その北東山麓，海抜640m辺りの所に本件のエドヒガンが生育している。本樹は，樹高約25m，胸高幹囲5.06mで，主幹は地上1.5mで南・北の2支幹に分かれ，南支幹はさらに1m位上で2岐し，北支幹は3m位上で水平に近い大きな横枝を出している。樹冠はほぼ球状で，よく発達している。 エドヒガン（ウバヒガン，アズマヒガンとも呼ばれる。）は，本州，四国，九州，朝鮮半島南部及び中国大陸中部に分布するサクラである。広島県内では，自生は少ないが，植栽されて育ったものが各地にあり，特に県東部にいくつかの大木が見られるが，胸高幹囲5mを超えるエドヒガンは，西日本では少なく，本樹は学術上貴重な存在である。		
県	天然記念物	帝釈始終のコナラ	たいしゃくししゅうのこなら		庄原市東城町帝釈始終字岩屋ケ谷山	平6.2.28			丘陵南西斜面，海抜約530mのところに樹高約30mの大きな樹冠を広げ，一際目立って生育している。主幹はやや南東に傾き，地上4.5mで2支幹に分かれる。主幹は，両側に浅い溝がある楕円柱状で，2本の木が癒着したようにも見えるが，確定はできない。 コナラは日本（北海道，本州，四国，九州）と朝鮮半島に広く分布し，広島県でもごく普通に見られる落葉広葉樹である。昔から，薪炭材，シイタケ栽培のほだ木，その他の用材として利用されてきたので，全国的にも大木は少ない。		
県	天然記念物	新免郷谷のエノキ	しんめんごうだにのえのき		庄原市東城町新免字郷谷	平6.2.28			丘陵の北東側斜面（海抜約380m）にエノキの巨樹が生育している。本樹は，樹高約28m，胸高幹囲5.2mで，主幹は，やや南に傾き，地上2.2m辺りで東・西の2支幹に分かれる。西側支幹はすぐまた2岐し，東側支幹はさらに2mばかり上で3岐して，よく茂った壮大な樹冠を形成している。 エノキは東アジアに広く分布する落葉広葉樹で，日本では本州，四国，九州の海抜1000m以下の地域にごく普通に見られる。本件のエノキについては，自然生か植栽か不明であるが，付近に「下峠荒神」と呼ばれる小祠があるので，それとかかわる神木として保護されてきたのであろう。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	上市のイロハモミジ群	かみいちのいろはもみじぐん		庄原市総領町字稲草	平6.10.31			上市の集落の北側，国道との比高約10m，海抜280m内外の南向き山裾に臨川庵（法福寺）跡があり，その西方約100mに共同墓地がある。この地域にイロハモミジがそれぞれ16株（以上墓地），2株（寺跡），計18株生育している。 イロハモミジ（一名タカオモミジ）は福島県以西の本州，四国，九州，朝鮮半島南部に分布する落葉広葉樹で，庭園樹としても広く植栽されている。成長が遅いので胸高幹囲2mを超えるものは大木といえる。胸高幹囲3m以上の木は全国的にも少なく，変種のヤマモミジ，オオモミジを含めても10余件が記録されているにすぎない。「上市のイロハモミジ群」は，最大のものは胸高幹囲3.25m，そのほか胸高幹囲2mを超えるものを9株も含み全国でも稀にみる大木群である。		
県	天然記念物	国留のヤブツバキ	くにどめのやぶつばき		府中市上下町国留字時鳥	平7.9.21			国留はJR上下駅の西方約1kmに位置し，ヤブツバキのある小さな丘陵は芦田川の支流である屋多田川の上流域にある。株元には元禄5・6年（1692・1693）建立の墓碑2基があり，口伝によると，当時，すでにこの墓の両側に2本のツバキがあったという。 このヤブツバキは，樹高約7.6m，胸高幹囲2.18mで，根の隆起が台状に高さ42cmあり，その上から計って，地上1.6mで二本の支幹に分岐し，それらはさらに地上2mで計5本の大枝に，地上3mで計9本に分岐し，全体として笠形の樹形をなしている。主幹には空洞があるものの，樹勢は良好である。 ツバキはツバキ科の常緑亜高木ないし低木で，東アジアの固有種であり，日本・朝鮮半島・中国南部に自生し，北限は青森県夏泊半島椿山である。ツバキにはヤブツバキ（ヤマツバキ），ユキツバキ，リンゴツバキの三変種があり，これらから導かれた多数の園芸品種があって，世界的に庭園樹として重要な樹木となっている。		
県	天然記念物	津田明神の備北層群と粗面岩	つだみょうじんのびほくそうぐんとそめんいわ		世羅郡世羅町下津田	平10.9.21			世羅郡西町北部にそびえる標高約593mの津田明神の山体は，備北群層の堆積（1400万～1600万年前）から，それに引き続いた粗面岩の活動，さらに玄武岩の活動までの地震記録を最も完全に近い形で保持している。 備北群相当層及び粗面岩が形成されたのは，新生代新第三世紀中新世（2300万年前～500万年前）の中期である。その当時，アジア大陸東縁部では下部地殻～マントルに達するようなリフト（大型裂帯）が形成された。その東側は大規模な火山活動を伴いながら南に移動することにより，日本列島が誕生し，アジア大陸との間に日本海が形成された。 本露頭は，このような日本列島誕生時の激しい地殻変動，すなわち海域での地層形成→陸化→粗面岩の噴出という，海陸で起こった一連の地質現象を明瞭に記録した極めて貴重なものである。		
県	天然記念物	鏡浦の花崗岩質岩脈	かがみうらのかこうがんしつがんみゃく		尾道市因島鏡浦町字小鏡	平17.4.18			鏡浦集落の北東端にある岬の突端から南に続く東海岸に見られる地質現象である。 黒色の泥質岩(でいしつがん)類を主体とする堆積岩類中に，優白質の花崗岩質岩脈が，南北方向にほぼ水平に貫入している。 岩脈の主脈部分は，北端では約2mの幅であるが，多少の膨縮を繰り返しながら，南に約120mにわたって連続している。主脈から分岐した支脈は幅数cmの細脈となっている。露頭の北端から約60m南では，淡緑色のランプロファイヤー岩脈が堆積岩類と花崗岩質岩脈を約1m幅で垂直に切って貫入している。 以上のような岩類から構成されるこの露頭は，広島県南部の地質現象を代表する典型的なものである。干潮時には，海岸に沿って連続する露頭を詳細に観察することができる。 (注1)「花崗岩」とは，石英・長石を主成分とする岩石で，ごま塩状に黒雲母が散在し，全体としては白みがかったものが一般的。通称は御影石と言い，建築材や墓石などの石材として多用される。 (注2)「岩脈」とは，マグマが他の岩石の割れ目に貫入して凝固し，脈状につながっているもの。この露頭の花崗岩質岩脈は，約9000万年～8000万年前の中生代白亜期後期に形成された。 (注3)「泥質岩」とは，岩石や鉱物のかけらが泥・粘土などの粒となり，堆積して固まって岩になったもの。この露頭の泥質岩類からなる堆積岩類は，中生代ジュラ紀（約2億300万年前～約1億3500万年前）に形成された。 (注4)「ランプロファイヤー」は，輝石・角閃石・黒雲母などの有色鉱物の割合が多い，濃色斑状の半深成岩。		